

チート転生を断ったら、日替わりでチート能力を届けられるようになった

おもちさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

??あらすじ

1度目の転生に失敗し、チート付きの再転生を断った主人公のタクミ。

意地になった女神は様々なチートを与えようとするが、本人は完全にやる気ナシ。

日替わりで用意するチート能力をエサに、無気力状態のタクミを本気にさせる事はできるのか？

終わりの見えない女神の挑戦が今、幕を開ける。

目次

第1話	平凡に生きたい	1
第2話	初日くらいゆつくりさせろ	3
第3話	真剣な話の時ほど笑っちゃう	5
第4話	意識高い系と 意識無い系	12
第5話	即レス地獄	16
第6話	完全に浮浪者	20
第7話	おうちを さがそう	23
第8話	健やかさんになる為に	27
第9話	この少女 馴染みすぎ	31
第10話	誰かあの子を止めて	35
第11話	領主館へ急行セヨ	40
第12話	交渉下手の会話	46
第13話	セルフ・取扱説明書	53
第14話	商人の手癖	57
第15話	第2の転生者 リョーガ	63
第16話	甘えたいお年頃	69
第17話	男はケツで語る	72
第18話	再建の第一歩	76
第19話	5人ではじめる独立戦争	80
第20話	不公平な住み分け	85
第21話	暗躍する影	88
第22話	出来すぎたメイド	92
第23話	泣き虫さんは だあれ？	97
第24話	年寄りの話は長い	102

第25話	アンケートはおふぎげ厳禁	107
第26話	フワツと始まる、第一次アシュレリタ戦役	111
第27話	失言は死を誘う	115
第28話	男性読者必見のお風呂回だよ！※挿絵ナシ	119
第29話	あだ名を付けよう	124
第30話	触れてはいけないもの	128
第31話	お気に入りのお枕	134
第32話	明け方のメッセージ	138
第33話	6体目	142
第34話	惨敗の果てに	146
第35話	夜が明けて	152
第36話	唯一の手段	156
第37話	増長の果てに	160
最終話	転生を断ったら、女神がチートスキルをくれた	164

第1話 平凡に生きたい

オレは今、真っ白な部屋にいる。

いや、部屋かどうかはわからないか。右向いても左向いても全部真っ白だ。だだっ広い空間なのかもしれない。

そんな場所に腕組みをした女性が一人、ぽつんと立っていた。見るからにキゲンの悪そうなその人は、オレの顔を見るなりため息をついた。

なんだか感じ悪いな……。そう思っていると、相手が口を開いた。

「まさか、あんなアツサリ殺されるなんてね。ちゃんとチート能力まで与えてやったのに」

「は？ いきなりなんの話？」

「そっか、覚えてないんだね。じゃあ教えてあげる。あんたは別の世界からやってきた『転生者』だよ」

「別の世界？」

「そう。その世界で死んだアンタを一度チート能力付きで転生させたんだけど、今度はこっちの世界でも死んだって訳」

「つまりオレは2回死んだって事？……全く記憶にないな」

本当に何も思い出せない。どこから来たのか、家族は居たのか、好きな食べ物、自分の名前でもさえない。

まるで自分の中身がカラッポにでもなったような気分だ。

「まあ、記憶についてはなんとかなるでしょ。じゃあ転生のオカワリいこうか。今度はもつとスゴイ能力あげるからさー！」

「いや、いらんし。転生もしたくない」

「そうでしょそうでしょ！ 今回の全属性のブーストが……は？」

「ん？」

「え、今いらんって言った？」

「言った、いらん。めんどくさいし」

オレがそう言い切ると、女神は顔を真っ赤にして震えだした。そもそもコイツは本当に女神なんだろうか？

なんだか神様っぽさに欠けてるような気がする。

「アンタねえ、前回失敗したからって私の力なめてんでしょ?!」

「いや、そうじゃねえが。何もしたくないだけ」

「ああもう！ 10代のクセにジジイみたいな事言ってるじゃないわよー」

「ふーん、オレって10代なのか。いくつ?」

「18! ってそこじゃない!」

歳聞いたらキレられた。なんだよコイツ、沸点低すぎ。自分の年齢を聞いちゃうオレもアレだと思うが。

「ともかく、アンタの転生はもう決まった事なの。ブツクサ言わずに復活しなさい」

「マジかよ。そうやって何度も生き返らせるってマズくないの?」

「細かい事はいいの! 面倒くせえガキが」

「あーもう、クツソだりい。死んだままでいいじゃんよー」

「うっさい。あと近いうちに、もつとすんごいチート能力持つていくから。そんなときは私に感謝しなさいよー」

「えー、いいよそんなん。平凡に生きさせてくれよ」

「クソが……、絶対お礼を言わせてやるからな!」

その言葉を最後に視界が急にまぶしくなった。転生とやらが始まったのかもしれない。こんな何も覚えてない状態で生き返ってどうすればいいんだ?

心がカラッポのオレは、生きる気力まで無くなっていた。

第2話 初日くらいゆっくりさせろ

ぐああ……頭いってえ。視界がぼんやりするし、何より頭を鈍器でぶん殴られたみたい痛い痛え……。

しばらく痛みに耐えていると、周りのものが見え始めた。

ここは家の中らしく天井が見えて、ボロボロの木の壁、使い込まれた家具が見えた。オレはベッドに横たわっているようで、変色した木製のベッドに寝ていた。

どうやらここがオレの家、なんだろうか。何となく見覚えがある気がする。

あの女神め。チートだの言う前に、もう少し良い暮らしを用意できなかったのか？

大商人とか貴族の家の子になるとかさ。マジでつかえねーわ。

オレはとりあえずベッドに横になった。特に動く理由もないし、腹も減ってないし。そういやメシどうすつかない、この部屋の中に食うものはあるのか？

不安になったオレはベッドから手を伸ばして、引き出しやら戸棚を漁った。小さいパンが3つに保存用の干し肉が1つ見つかった。

よし、これで2日は持つな。

気持ちが悪くなったオレは本格的に寝る姿勢になった。今日は転生したばかりだから、動くのは明日からでも遅くない。

「きやあー！ー！ 助けてえー！ー！」

外から突然叫び声が聞こえた。若い女の声だ。なんか大変な目にあつてるらしい。

……まあ、助けになんか行かないけどね。そういうのは正義感タイプかモテたい系のヤツがやればいいんだ。

「助けてえー！、このままじゃ魔物に、魔物にい！」

ふーん、そっか。魔物に襲われてるんだ、大変だな。やっぱ転生した世界は剣と魔法の世界なんだろうな。

魔物もゴブリンとかオークとか、ドラゴンとかいんのかな？

「ああ、このままじゃ16歳美少女の私が、魔物に大切なものをー！」

なんだ、まだそこに居んのかよ。つうか結構余裕あんじゃん。だんだん説明分つぽい叫び声になってるし。

そんな君なら大丈夫、きつと一人でやれるから諦めんな。

「助けるつつつてんでしようがぁー！」

ドオオン！

うわ、なんだコイツ。いきなり家に乗り込んできたぞ。さっきの叫び声出してた女か？

目の前にはオレより若いっぽい少女が居た。透き通るような蒼いサラサラのセミロングの髪に、大きな胸を強調するように胸元が大きく開いた服、そして妙に短いスカートをヒラつかせている。

その女を見たオレの感想はというと……。

寒そう。

それか『そんな装備じゃこの大陸でやっていけねえぜ』だ。

魔物に襲われるリスクがあんのにそんな軽装なんて有りえないだろ。

思ったのはそれだけ。顔立ちも整っていて美少女だとは思うが、ほんとそんだけ。

「あなたねえ、普通女の子が助けを求めてたら飛びつくでしょ？ アピールするチャンスでしょ！」

「なんだよそれ、知るかっての。人の二度寝を邪魔すんなよ」

「はぁー……、枯れたオツサンみたいなこと言ってる、私と歳変わんないくらいなのに」

「うっせ。つうか帰れ」

「無理、道に迷ったから」

「そうか、じゃあ出てけ」

「野宿になっちゃうからイヤ」

それから何度言つても出て行かなかつた。マジでここに泊まる気がする。一体何がしたいんだコイツは……。

転生してからは平凡で静かな生活を送ろうと考えていたが、初日から静かではなくなってしまった。

第3話 真剣な話の時ほど笑つちやう

翌日。

例の女は当然のように泊まっていった。ちなみに魔術師で、レイラって名前らしい。

クソどうでもいいな。

陽が高く昇った頃、オレはようやく起き上がり遅めの朝食を摂り始めた。レイラはその間水浴びに行ってくるらしい。『のぞくな』と釘を刺されたが、頼まれたってやるかつつの。

水で口を湿らせながらパンをかじっていると、どこからか光の粒のようなものが降ってきた。フワリフワリと宙を舞い、オレの目の前で一瞬輝いて消えた。

突然の事に驚いていると、頭の中で文字が浮かんでくる感覚に襲われた。

『よう、生意気な転生者。生まれ変わった気分はどう？ 美女神様からのチート技能だよ。好きな方を選びな』

この口調はきつと昨日の女神だろうな。挑発的な言葉が軽くムカつく。理屈はサツパリだが、これはヤツからのメッセージなんだろう。その2つの技能とやらはこんなものらしい。

【装備中！】全属性補正・極大

？すべての攻撃魔法に大きなダメージ補正がつく

・ 剣術スキルー 剣聖

？片手剣装備時に大きなダメージ補正がつく。剣技能による特殊技が使えるようになる。

☆女神様の一口メモ☆

キミには世界を救う使命があるゾ！能力は慎重に選ぼう。

果てしなくウザい。特にメモが。

面倒だから最初の能力のままにしておいた。どこかからか舌打ちが聞こえた気がするが、気のせいだろう。

ドアがキィと開く。髪を濡らしたレイラが入ってきた。どこことな

く不機嫌だ。

「ただいま、本当にのぞきに来なかったのね」

「たりめーだ。それ何の得があるんだよ」

「っ！ タクミは18歳なんですよ？ その年頃の男子ってこう、女の子の事で頭が一杯になるんじゃないの?!」

「さあな。人は人、オレはオレだ」

正直な話、それを言われると胸が少しだけ痛んだ。相変わらず記憶の大半は戻らず、何に対しても気力が湧いてこない。

元々こんな人間だったのかどうかさえわからない。まるで世界から自分だけ切り離されたような、不思議な孤独感を感じていた。

「で、陽も昇ったわけだ。もうこの家に居る理由はないよな。じゃ、帰れ」

「……ふもとの街まで送って行ってよ。お礼もできるから」

「いやだ、ダルい、めんどい、死ぬ。オレに構わないでくれ」

「食料とか、足りてないんでしょ？ お父様ならきつと力になってくれるわ。ていうか、いま死ねって言った?」

「食いもんか……、確かにあると嬉しいな」

「死ねって言ったよね?」

「ほんつとに面倒だが、近いもんな。見物がてらに送ってってやる」
「ねえってば」

紳士なオレはレイラの安全を考え、快く街まで送る事にした。どうやらこの女は富豪の娘らしく、そこそこ裕福な暮らしをしているらしい。

そんなヤツがあんな家で夜を明かすなんて、物好きなんてレベルじゃねえな。

山道を二人で下っていく。レイラはオレの手を繋ごうとしてきたが、拒否だこのやろう。そうすると上着の裾を掴んできた、歩きにくいだろが。

整備されていないケモノ道を進み、ゴツゴツした岩場を越えると、すぐにたどり着いた。

送る必要の無いくらい近距离だった。まあ、ここまで来たらブツクサ言うのはやめよう。とつととコイツン家行ってお別れしなくては。

街はというと、目立ったものは見当たらない、ボツ個性な場所だった。

ここらで一番賑わってる商店街、多くも少なくも無い家屋、街を囲む防壁に、遠目に見える領主館。

そして、領主館の近くに大きな建物が見える。レイラはそれを指差して言った。

「あそこ。あの大きな家が私の家よ」

「へえ、ずいぶん立派じゃないか。じゃあとつとと送るぞ、お前とはそこでお終いだ」

「う、うん。あのさ、せつかく近くに住んでるんだし、お友達になろう？」

「はい、前向きに検討するときマース」

なるとは言っていない。

レイラの家に向かって歩いていっていると、目的地の方から叫び声が聞こえてきた。何人もの使用人達がこつちを指さしたりしてる。

「どうやらこつちに気づいたらしい。それならきつと話は早いだろう。」

館から武装した集団が現れてこつちに向かってくる。なんだこの空気？

「お父様、ただいま戻りました……これは一体？」

「レイラ、無事だったか。さ、早くこつちへ！」

「え、ええ？」

レイラが偉そうなオツサンの後ろに追いやられると、何十本もの槍

の穂先がオレを取り囲んだ。よく手入れされた武器が太陽の光を反射している。そのうちの一つの光が、オッサンのたるんだアゴ肉に当たってる。

あ、やばい。ちよつとツボに入ってきた。オッサンの顔が真剣なだけに一層面白いんだけど。

「貴様、よくも可愛い娘をさらいおって。死ぬ覚悟はできているだろうな?」

「ちよ、ちよつとお父様! どうしてそうなるんですか!」

「レイラ、もう心配はいらないよ。世の中の危険は全部パパがやってけてやるからな」

「違うの! その人は迷子になっていた私を助けてくれたんです!」

「ふん! どうだか。こんなみすぼらしい男が悪事を考えんわけがあるか! 金かレイラ自身が目的だろう!」

「ブフツ。アゴに、アゴに……!」

「貴様ア! 何がおかしい!」

顔を真っ赤にしてオッサンが吠えた。悪りい、そりゃこんなシーンで笑われたら怒るよな。真っ赤な顔の下に槍の形をした光が当たっても。

……当たっても。

あ、やべえ。これ無理なヤツ。

「ブヒヤヒヤヒヤ!」

「っ! 殺せ、今すぐここでだ!」

「ハッ。総員、一斉に突けエ!」

数え切れない槍がオレに向かって突き出された。殺意で満たされた槍はオレを貫いて……なんてことはなく。カキーン、なんて音をさせて皮膚にすら刺さらず止まった。

もちろん、血は出ないし痛みもない。なんだこれ?

こいつらが弱すぎんのか、オレが強すぎんのか。まあ後者だろうな、刃物が効かない人間なんて居るわけないし。

「や、槍が効きません！」

「そんな馬鹿な話があるか、もう一度やれ！」

さすがに2回も許すほどオレもお人好しじゃない。囲んでる連中に素早く近づき、顔をビンタしてやった。

そうすると、男が向こう側まで吹っ飛んだ。その時に歯も折れたらしく、白い塊が辺りに転がった。

うわ、やっちゃまった。さすがにこれは可哀想だ。もっと手加減してやらないと後味が悪すぎる。

唾然としている別の男に攻撃を仕掛けた。今度は鎧の部分。硬いから大怪我しないで済むだろう。

「じゃあちつと痛い思いしてもらおうぞー。よいしょつと」

メキヤメキヤメキヤッ！

「ぎいいやああああー！」

うわあ、今度は鎧が体にめり込んだぞ。肩のパーツがグニヤリとひん曲がって生身の部分に食い込んでる。これもダメなのか。

仕方ないので、オレは手当たり次第に下っ端を掴んで、遠くに投げ飛ばした。

5軒くらい先の家にぶつかり、そこで止まった。ちようど気絶もしてくれていい感じだ。

「な、なんだこの化け物は！」

「怯むな、かかれえ！」

一斉にかかってきたけど関係ない。みんなまとめてポイポイ投げてやった。あまり力を入れすぎると屋根の向こうまで飛んでしまう。加減が割と難しい。

50人くらい投げると、残ってるのはオモシロおじさんだけになった。

「わ、ワシに歯向かってタダで済むと思うな」

「そう。お前らが相手なら負けそうにないけど」

「クツ、何なんだ貴様は！」

「オレが誰だろうと、お前には関係ないな」と

最後の一投はキレイに決まったな。投げ飛ばした兵士達の一番上にポコッと乗せることができた。

さ、無駄足になっちまったな、アホは片付いたし帰るか。

「じゃあな、レイラ。面倒くさいおっさんと面白おかしく生きていけ」
「あ……えっと」

別れてから街の外へ向かった。このままあの家に戻ってもいいんだが、これから報復が待ってるんだろうな。相手を殺すまで終わらない系のやつ。

はあー、オレは静かに暮らしたいだけなんだが……どうしてこうなったのか。

後ろから誰かの駆け足が聞こえる。振り向くと息を切らしかけたレイラがいた。

「ねえ、どこか別の場所に行くんでしよう？ 私も連れて行って」

「なんでだよ、あの屋敷でお嬢様やってろよ」

「さっきの見たでしょ？ お父様ってちよつとおかしいの！ 私それが本当に嫌で、もうあそこに戻りたくないの」

「ふうん、あつそ。オレには関係ないが」

「私って、いろんな人に顔が利くのよ。だから連れて行った方がお得よ。ね、付いていっていいでしょっ」

「いやだ。帰れ。疫病神。くたばれ」

「ありがとう！ これからも……え、いやって言った？」

「言った。くたばれとも」

「ここは新しい仲間が増えるシーンでしょうが！ セオリーでしょう?!」

それから何十回も同じ会話があつて、結局オレが根負けしてしまつた。

さすらいの旅くらい静かに過ごしたかったが、それすらも無理みただい。

この時ついた溜め息は、魂の奥底からでてきた気がした。

第4話 意識高い系と 意識無い系

「旅っていいわよねえ。これから何が起こるかワクワクするもの」
街を出たオレ達は街道をノンビリ歩いている。陽が高いからか、同じ道を行く者も少なくない。

「私ってあの街から出してもらえなかったからさ、だから外の世界を見るのがすっごく楽しいの！」

行商人、旅人、早馬を走らせる配達員、道端でうずくまってブツブツ言ってる男。

こうして見ると、世の中いろんなヤツがいる。それぞれがそれぞれの人生を生きてんだなあ。

なんとなく感慨深い気持ちになってきた。

「これからどうしようか？ 宝探しとか迷宮探検？ それとも伝説級の魔物退治とか！ 世界中の街巡りもいいよねえ。 ねえ！」

「なんだよ、さつきからうっさい。大声出すな」

「だから、目的だつてば！ 私たちはこれからどんな冒険をするのつて話！」

「は？ 何もしねえよ」

「え？」

ビシリツと音が聞こえそうなくらい、キレイに固まったんだが。オレそんな変な事言つたか？

「え、旅しないの？ 大迷宮とか踏破しないの？」

「しないの」

「邪竜退治とかは？ 世界の果ての秘宝探しとか、失伝した魔術の発

掘とかは？」

「しないの」

「じゃあ今何してんの？」

「新しい寝床さがしてんの」

「世界中を巡らないの？ そんなに強いのに？」
「強いのになの」

それを聞いてレイラは死人のような顔色で項垂れた。コイツおもしろえな、秒単位で表情がコロコロ変わる。

「しよーよおー、邪竜退治い。行こうよおー、大迷宮う」

「やだ。めんどい。だるい。カス野郎」

「何がそんなに嫌なのよ。あとこっそり毒はくのやめて」

「そんなことしてもメリットがないだろ」

「あるわよ、すごいメリットが！」

レイラは鼻息を荒くしつつ、得意顔でオレを見た。『何も知らないあなたに教えてあげる』みたいな目がイラツとくる。

ロクでもない話っぽいけど、一応聞いてみるか。

「なんだよ、言ってみろ」

「ふふん、そんな偉業を達成するとね……なんと！ 『世界の偉人伝』に載っちゃうのよー！」

「……は？」

「すごいでしょ、ステキでしょ？ 権威ある図書に載るなんて。決して消えることは無く、私たちの伝説が永遠に語り継がれるの！」

目を輝かせて小躍りし始めたぞ。お前は夢見る少女か。あ、少女だった。

レイラの頭に花畑が咲いている。今が見頃の満開ってやつだ。

そんなプランター女の脇を掠めるように、幌馬車が駆け抜けていった。車内は荷物を満載しているのか、車体が大きく沈んでるように見えた。

その一台を見送っていると、また一台、また一台と走り去っていく。ムチの打ち方も激しく、馬の悲鳴が聞こえてきそうだった。

「なんだこれ、引つ越しブームか？」

「どうせまた噂が流れたんでしょ。きつと真に受けて逃げ出したのね」

「噂ってなんだよ」

「魔人王絡みの噂よ。最近はどここの地方で復活するか、よく話題になるの」

「マジンオウ？」

「え、知らないの？ 数百年前に人間を圧倒した魔人の王よ。本気で知らないの？」

「記憶がゴザイマセーン」

「……そうだったわね。まだ名前くらいしか思い出せないんだっけ」

ため息混じりにレイラが魔人王の話を教えてくれた。

まず、魔人つてのは突然変異して生まれた人間で、メチャ強いらしい。それで魔人が増え出して、集団ができて、王を名乗るヤツが出たと。

人間は負け戦が続いたけど、どこかから現れた救世主が魔人王を倒したらしい。

なんかどこにでも有りそうな話だな。

「この英雄譚もかっこいいのよ！ 最後に救世主は魔人王と相討ちになるの。救世主は壮絶かつ、見事な最後を遂げたって話で締め括られてね」

「ん、なんで最後のシーンまで正確に語られてんだ？」

「その場に人が居たからよ。大勢の人が見たって物語には書いてあったわ」

「え、それおかしいだろ」

「どこが？」

「超人同士の戦いの場を、なんで多数の人間がノンキに見物してんだよ。ちよつとした攻防戦の巻き添えで皆死んじまうだろ」

「あ……」

『遠くから見てた』とか『結界を張ってた』とか言ってるが、当の本人も納得がいてないみたいだ。すごく沈んだ顔をしている。

どうやらレイラの花を一本折ってしまったらしい。悪いな、夢見せてやれなくてよ。

翌日。野宿でダルさが倍増したオレのもとに、女神からチート能力が届けられた。

■無垢なる魂

?どんな話でも心から信じるようになる。信じた回数だけ能力がアップ!

だとき。

ケンカ売ってんのかあの野郎。

第5話 即レス地獄

朝飯を食った後ノンビリしていると、レイラは川の方へ向かった。どうやら髪を洗いたいらしい。ずいぶんマメなやつだな。

このまま待つてんのも暇だ、二度寝しよう。

道端にちょうど切り株があったから、頭を乗せて寝転がった。天気は快晴なので太陽の日差しが眩しい。

視界から太陽を追いやって頭の向きを変えると、空から見慣れた光が落ちてきた。毎朝見掛ける女神のアレだ。

今日のギフトはもう貰ったよな、突っ返したけど。

フワリフワリと落ちてきた光は、いつものようにオレの体に触れてからフツと消えた。

『なんでアンタ、技能を変えないの?』

クレームだった。

その為だけにわざわざ光を送ってきたのか、暇人か? つうかコレに返事なんて出せんのか?

何もせずに寝ていると、またフワリと降ってきた。何なんだよ……。

『地面に大きめの文字書いて。それ読むから』

クソうぜえ。でもこれ返事しないと延々続くパターンじゃないか?

もったいぶる様に体を起こして、手頃な木の棒を見つけて地面に書いた。

ーー使えねえのばっかだから

剣聖はまだいいとしても、無垢なる魂は完全に悪ふざけだろ。

人のことを悪質な客みたいに言いやがって。
しばらくすると、また光が降ってきた。

フワリ。

『あつそ。それで、なんでアンタそんなに強いのか？』

いや、オレに聞くなよ。あれこれ操って生き返らせたのはお前だろ。

てつきり全部把握してるもんだと思ってたが、違うのか？

ガリガリ。

ー知らない

フワリ。

『そっか、知らないかー』

……え、終わりかよ。

何だ今の返事。この流れ要る？

コイツひよつとして延々話し続けるタイプか？

ガリガリ。

ー用があるなら いっぺんに言え

まったく、人の二度寝を邪魔しやがって。無駄なやり取りさせんな。

しばらく間があいて、またフワリ。

『あーすいませんね色々邪魔しちゃってさ？ 転生者様はお忙しいですよねーこんなクツソくだらない会話に巻き込んだんじやつてすいませんでしたー！ 次こそすっげえ能力くれてやるから吠え面かくなよ？ じゃあな！』

やっぱりそこで終わりかよ。

結局用件はなんだったんだ、グチと暴言しかなかったぞ。

オレが返事をしなかったせいかな、新しい「お告げ」は来なかった。

「タクミーただいま。……なんかあった？」

「ちよつとクレーマーを撃退してた」

「え、道端で？」

「なんでもない、そろそろ行くぞ」

あーくっソムカつくー！

なんだあの転生者！ 全然コントロールできねえー！

モニタリングした画面にはタクミと美少女がくっちゃべってるシーンが映し出されている。使命そっちのけで女連れとはいいい身分だなこの野郎。

……本人も知らなかったか。

冷静になった私は、タクミをモニターで追い続けながら呟いた。

今タクミが身に付けてる「全属性補正・極大」はあくまでも攻撃の時にのみ効果を発するものだ。もちろん、物理攻撃に補正はかからず、魔法を使った時にのみ意味のあるもの。

先日見せた大立ち回りは、明らかに異常だった。タクミ本人は一般人と比べたら「いくらか」強い程度でしかないはずだ。

ひよつとして、私の知らない何かが起きている？

仮にも女神を自称する者だ。この世界で起きている事の大体は把握している。ほんの一部を除いては。

いや、タクミが強い事自体は悪い事ではない。今は目の前の問題に取り組もう。

魔人王復活まで、現地時間でおよそ半年。それまでにタクミには強くなつてもらわなくては。

私は次のチート技能の準備の為、モニター前から席を外した。

第6話 完全に浮浪者

あれからしばらく街道を進んだ。

魔人王復活の噂の効果はテキメンなようで、数えきれない程の荷馬車がオレ達を追い越していった。

レイラの話では数百年も昔の人物なんだが、いまだに影響力が強いようだ。おとぎ話上の存在だとは考えないらしい。

ようやくセントラル・ミレイアと言う名の都市についた。円形の石壁に囲まれた、良くある地方都市だった。

整備された大通りの左右には石造りの商店が並び、様々な客引きの声が聞こえる。建物の間を埋めるように露店も並び、民芸品やら装飾品なども売られていた。レイラがちらちら目移りさせているが、オレは足を止めずに歩き去った。

地方都市とは思えない賑わいで、往来は人で埋め尽くされている。例の噂で逃げてきた人間も多分に含まれているんだろう。街の入り口は荷馬車で行列ができていた。

魔人王ってのはそんなおっかないのかねえ？ そんな奴らを横目に歩き続け、街の中心部にたどり着いた。

そこは円形の噴水付きの広場が作られていて、噴水に背を向けるように椅子がいくつも置かれていた。普段であれば住民の憩いの場だったり、旅人が気を休めるための休憩スポットになるんだろう。今は物々しい演説をするものが居て、辺りは緊張感に包まれている。

ー領民たちよ、魔人王の復活は近い。しかし恐れるばかりで良いのか！

演説をしているのは若い騎士のようだ。正義感の塊のような真っ直ぐな瞳をした、融通がきかなそうな取っ付きにくいタイプだ。

それでも説得力や安心感があるらしく、道行く人は足を止めて彼の

演説を聞き続けた。

——我らの祖先は見事、魔人王を撃退した。あれから我ら人類の文明や技術は著しく成長した。もはや魔人どもなど敵ではあるまい！
事実、我が騎士団は魔人どもが巢食う拠点を、いくつも叩き潰している。魔人が人類より優位に立っていた時代は終わったのだ！

そこまで耳にして、オレの頭に鋭い痛みが走った。電気が頭を駆け抜けたようにツキインとした頭痛だ。もしかして風邪でも引いたのかもしれない。体を休めようとして裏路地に入ると、急に痛みが治まった。一体なんだったんだ？

「ねえタクミ、大丈夫？ さっきまで顔真つ青だったよ？」

「ああ、平気だ。疲れてんのかもな」

「まあ大丈夫ならいいんだけど。それでこれからどうするの？」

「とりあえず今日の寝床を探そうか」

「そう、じゃあ宿屋に向かうのね」

「宿？ お前金持ってんのか？」

「え、持ってないわよ。慌てて出てきたんだもん。え、もしかしてタクミもっ…」

「ねえぞ。サイフすらねえ」

「ええ——!？」

言葉を失うってこういう事を言うんだな。目も口も大きく開けたまま固まってるぞ。絵に残したいくらい良い表情だ。

「じゃあどうするの？ 宿は？ ご飯は?!」

「この辺の路地は屋根があるからいけるだろ、メシは今日森で拾ったクルミとか食べばいい」

「そんな浮浪者みたいな真似なんではなきやいけないのよ！ てことはこの街で今後の食料も買えないじゃない、有りえないわよ！」

「お、そうか。オレとスタイルが合わないな。じゃあお前は自分の家

にかえ……」

「最近痩せたかったから木の実だけのご飯くらいが丁度いいわね、この路地も寝るのに十分なスペースがあるし、今日はここでいいんじゃない？」

なんていうお手本のような手のひら返し。こいつお嬢様暮らしのクセに以外と根性あるな。過酷な生活を味あわせて実家に帰そうと思ってたんだが。

レイラが言ったように、文字通りオレたちは無一文の浮浪者だ。面倒だから働いて稼ぐ気はない。夜までここで横になって、夜になったら普通に寝よう。ごろ寝サイコー。

その夜にオレは珍しく夢を見た。妙にリアリティのある、あやふやな部分のない不思議な夢を。

第7話 おうちを さがそう

これは、夢だな。

オレは目の前で繰り広げられる出来事が、現実でないことを理解できていた。たまに「これは夢の世界だ」って気づくことあるよな。

それで、今がまさにそれ。

場面はどこかの部屋だな。

石造りの部屋はそこそこ広くて、柱には細かな装飾が施されている。バカ高そうな絨毯が敷かれ、部屋の隅には大きな壺だか花瓶だかがあり、それぞれ結構な値が付きそうだな。

恐らくこの主人はそれなりの身分の人物だろう。

その部屋には二人の男が向き合っていた。薄暗さのせいかな、顔までは確認できない。お互いが武器を手にして向け合っていることから、戦闘の最中なんだろう。序盤戦ではない事を弾ませている肩が物語っている。

――魔人王、お前もここまでだ！ このまま斬り殺してやる！

向かって左側の男が叫んだ。なんつうか、主人公タイプっぽい。正義感にまみれてそうな声が響き渡った。向かって右側の男が皮肉交じりに笑う。

――お気楽なもんだ。オレを殺せば終わりだと思ってるのか。

――何を言っている、お前さえ居なければ魔人はお終いだ。そして人間の勝利だ！

――お前も殺されるぞ。間違いなくな。

――な、何を言っているんだ。どうしてオレが殺されなくちゃならないんだ。

「起きてー、朝だよー！」

――からない……のか、……前を許す……ないだろう。

「起きてってばー。もう陽が高いんだからさー」

「ーそん・・・はない。・・・言うな・・・！」
「おっはよーおっはよー！ イタタタ、痛い痛い！」

謎の声に引つ張られるように、オレは夢から覚醒した。

クソツ、あの話の続きが気になる。肝心なところが汚されて読めない、古本の小説を読んだような気分だ。

目を開けると右手が何かを握りしめていた。がっちりアイアンクローを決めているが、相手はきつとレイラだろう。睡眠を邪魔されて反射的に技をかけてしまったようだ。

「離して、メツチャクチャいったいコレ！ 顔が面長になっちゃうー！」

「おはよう、いい朝だな」

「ええそうね。ついさつきまではね！」

レイラは朝っぱらからご機嫌斜めだ。こんな清々しい朝を迎えたのに、人生損をしているぞ。

「さて、じゃあ街の外に移動しますかね」

「外に行くって、何する気？」

「そりやお前、この街の周辺で住めそうな所を探すんだよ」

「え、じゃあなんでセントラル・ミレイアに来たの？」

「何って、下見だけど」

「下見？」

首を90度とって差し支えないくらい大きく傾げている。どうでもいいが、こいつの仕草は大体あざとい気がする。ナチュラルにやってんなら別にいいが、男受けを考えてわざとやってんなら腹立つな。

もしそうなら説教だ。ケツビンタもついでに付けてやる。

「もし今後お金を手にいれる機会があったら買い物するだろ？ その

とき品揃えの良い街の近くに住んでの方が便利だろ？ 昨日はその店構えとかを調べてたんだ」

「お金を手にいれる機会って……働く気はないんでしよう？」
「ないの」

「ねえー、何かやろうよー。そんだけ強いんだから討伐とかいいじゃないさー」

「やんないの」

「じゃあ他に何してるつもり？」

「寝っ転がったり、ボーツとしたり、アリさん眺めたり」

「ねえ、本当に18歳なの?!」

クレーマー女を無視して街の外へ向かった。

街の防壁を抜けた辺りで女神からの今日のスキルが届いたが、スキル名が「ウハウハ大富豪」だった。説明を見る気すらおきん。金はないが困ってはいねえつつの。オレはな。

さて、ちようどいい寝ぐらを探しますかね。街道から逸れて森に入り、手頃な場所を探し始めた。

とりあえず川や湖の近くがいい、水は必須だからな。果物のなる木や、天然で生えてる根菜とか見つかるおそらくに良い。そんな所に使えそうな廃屋とかあればいいんだが……。

まあそんな都合のいい話はないか。

見つかったのはせいぜい木の実くらいで、他に収穫は今の所無い。川付近は街道に近いから避けたいが、他に水場は見つかっていないしどうしたものか。

つうかオレたちいっつも木の実食ってんのな。小動物の気持ちは今ならわかる。

「なんもねえな、完全に空振りってやつだな」

「こんな不毛なことしないでお金を稼いで……あら？」

「何だ、今の音……動物か？」

「もしかしたらウサギとかかも！ よっし、今日の晩御飯！」

レイラが音の出所に向けて杖を構えた。早くもこの生活に慣れ始めたのか、動物を狩る気満々だ。お嬢様育ちのくせにアマゾネスみてえだな。

草むらからソイツは飛び出してきたが、動物ではなかった。

燃えるような赤い髪をした10歳くらいの少女だ。特徴的なのはその真っ赤な頭と、色素を全て吸い取られたような白い肌、そしてロボロボの服だ。

その少女を見ていると……なんだろう。

初対面のはずなのに、どこか懐かしさを感じる。

オレは降って湧いたような親近感を前にして、小さなとまどいを感じていた。

第8話 健やかさんになる為に

森の草むらから赤毛の少女が突然飛び出してきたのだが、それを見たレイラが悲鳴をあげて飛びすさった。

「ま、魔人!? なんでこんな所に!」

「な、ここにも人間がつ!」

「レイラ、この子供が魔人なのか?」

「この髪見ればわかるじゃない、どう見てもそうでしょう!」

へー、随分目を引くと思つたら種族のシンボルだったか。確かに見えてきた中でこんな頭したヤツは居なかったな。

少女はオレたちと一定の距離を取りながら威嚇している。警戒度マックスって感じた。キバを剥いてはいるが全然怖くない。子猫にシャーって言われたときと同じ気分だな。

にらみ合いを続けていると、同じ場所から屈強な男達が現れた。そいつらは少女の髪を乱暴に掴んだ。

「このガキ、もう逃がさねえぞ! 手間かけさせんじゃねえ!」

「街の目前で逃げられるなんて、危なかったな。冷や汗かいちまったよ」

「アンタらコイツの足止めしてくれたのか? ありがとよ」

男達は少女を引きずるようにして立ち去ろうとした。少女は抵抗するが、体格差のせいで逃げる事ができない。

オレはその連中に何もせずに見送って……。

見送ろうとして……。

ズキリ。

オレの頭に痛みが走った。

昨日とは比べものにならないくらい、頭の芯から痛んだ。幻聴か空

耳のような言葉とともに。

「……から、……を頼……。」

一体なんだってんだ、昨日も街中で急に頭痛がしたし。それにこの声の主は誰なんだ？ わるふざけにしちやタチが悪すぎるぞ！

「離して！ 離してえ！」

「うるせえ！ 害獣のくせに人間様に逆らうんじやねえ！」

ズキリ、ズキリ、ズキリ！

頭痛はひどくなる一方で、頭のなかで割れ鐘を叩かれているようだ。あまりの痛さに手が汗ばんでいる。

「……から、魔……を頼んだぞ。」

「あー！ マジ痛ええ！」

何だよこれ吐き気までしてきたぞ。この幻聴、オレの神経をしつかり逆撫でしやがる。

もう勘弁してくれ、やめろ、やめろ！

「やめろおー！」

頭痛がピタリ。あー……良かったー。頭痛持ちのヤツってこんなに辛いのかよ。いやほんと大変だな。

少女と男達がピタリ。ん、どったの？ オレのこと凝視しちやつて。

レイラもピタリ。なんだお前ら、それ流行ってんの？

「てめえ、このガキを横取りする気か？ そうはさせねえぞ！」

「あん？ 横取りつつうか、自分の体調の都合のせいで」

「わけわかんねえ事言ってるじゃねえ。ブツ殺してやる！」

まあお下品、野蛮人。ブツ殺すですつて。沸点も低すぎるし、煽り耐性なさそう。

オレに向かつてシャムシールだのブロードソードだの、不揃いな武器の刃が迫ってくる。これ対処しなきゃダメだよな、クソめんどくせえ。

しようがないから突き出されら刃物をトントントントン！ まな板の上の食材のように、突きつけられた刃を輪切りにしてやった。

驚いて固まった間抜けヅラのど頭をターン、ターン、ターン！ リズミカルに、そして丁寧に蹴り飛ばした。

3人は錐揉みしながら吹っ飛んで、数本の本をなぎ倒して、1本の大木にぶち当たってようやく止まった。

正確に蹴り飛ばしたおかげか、綺麗に1列に並んでノビている。お行儀良し。

そして戦闘終了。

状況の変化についていけず、呆然としていた少女がおずおずと話しかけてきた。

「あ、あの……助けてくれるんですか？」

「ああ、そうしないといけないらしい。オレの健やかさの為に助けた」
「??? あ、ありがとうございます」

釈然としないながらもお礼を言われた。まあそうか、オレの説明じゃわけわかんないよな。

でもいいじゃん、助かったんだからさ。難しい話は置いときなつて。

ここでようやくレイラが発現した。今まで固まっていたのかよ？

「ちよつとタクミ！ もしかして魔人族の肩持つ気?！」

「そうだな、成り行きというか……半強制というか」

「あのね、この世界で魔人と関わって生きていけると思う？ どの国行っても捕まるか殺されるかしちゃうわよ」

「そうか、じゃあそんな旅にお前は連れていけないな。オレはこの娘と旅を続けるから、お前は故郷に……」

「差別反対！ 魔人はトモダチ！ 私はたった今、博愛主義者に転向したわよ！」

相変わらずの手のひら返し、コイツのはキレが違うな。

まだ疑い半分の魔人の少女の手を取り、必死に取り繕うレイラを伴って、オレたちは森の奥へと消えていった。

そして、書き置きのように例の幻聴が最後に聞こえた。頭痛の伴わない、メツセージだけが。

——オレの力をやるから、魔人族を頼んだぞ。

第9話 この少女 馴染みすぎ

オレは一身上の都合から、少女を男どもから助けたのだが。

じゃあ、気をつけてねーと送り出そうとしたら、またあの頭痛だ。ふぎけんよ。

ひよつとしてこの子の安全を確保するまで解放されないのか？

だとしたら、とんでもないことになっちまったな。

オレはまだ困惑顔の少女に今後の話を聞いた。

「えっとお嬢ちゃん……つうか、名前くらい聞いていいか？ オレはタクミって言うんだが」

「あ、すみませんでした！ 私はアイリスって言います。見ての通り魔人の子供です」

「私はレイラだから、よろしくね」

「それで、アイリス。お前を安全な場所に届けたいんだが、どうすればいいと思う？」

「ここから南西に行つたところに私の故郷があるんですが、そこに行けばもしかしたら」

南西の故郷ねえ。もうちよつと情報が無いとどうしようもないな。

言ってみれば大陸の4分の1が該当エリアって事になりかねん。

「それって、グレンシル地方じゃない？ 去年くらいに魔人の拠点が破壊されたばかりって聞いたけど」

「それは有力情報かもな。アイリス、どうだ？」

「確かに私の故郷はしばらく前に人間に襲われて……。そこは魔人族の最後の拠点だと聞いてました」

「じゃあきつと合ってるわ。今はもう無いけど、長らくグレンシルの沿岸部を制してたらしいし」

ふむ、じゃあその故郷に行けばいいのか？

元拠点だったなら、周囲に同族の大人もいるかもしれない。場合によつてはそいつらに預けてしまおう。そうすればきつと丸く収まるだろう。

「じゃあアイリス、不本意だがお前をその場所に送り届けてやる。ほんと不本意だが」

「そんな、タクミ様。助けていただいただけでなく、その後のお世話まで。どのようにこの御恩をお返しすればいいか！」

「まあ、私たちは暇だしね？ そんなに気にしなくてもいいわよ」

レイラがアイリスの頭を撫でながら言った。コイツなりの気遣いなんだろうか？

しかしこうしてみると、何となく仲の良い姉妹みたいに……。

「気安く触らないでください、ニンゲンの女。私はタクミ様にお話ししているのであつて、あなたにはありません」

見えなかった。

オレとレイラとの対応に随分な温度差があるな。オレ一人で悪漢から助けたからつう理由じゃ無いみたいだが。

「やっぱり人間は嫌いか？ オレも人間なんだがな」

「確かにニンゲンは苦手ですが……、タクミ様は少し違います。確かに見た目はニンゲンなんですが」

「なんだそれ。ひよつとして強いからとか？」

「そんな理由じゃないと思いますが。すみません、うまく言葉にできません」

なんだか良くわからんな。まあ、コントロールはできそうだから連れ歩けるか。

これでオレまで嫌われてたら送り返す事も難しいからな。

「つうことだ、レイラ。お前はあんまちよつかい出すなよ」

「……別にいいけどさ。なんか納得いかないな」

「家に返すまでの辛抱だ、我慢しろ」

ちなみに歩いて向かうと2ヶ月くらいかかるとか。安請け合いですもんじゃないな。まあオレに拒否権は無いわけだが。

しばらく歩いていると、アイリスも少しずつ心を開き始めた。

自分の身の上話やら、故郷の話やら、捕まった時の話を断片的に語ってくれる。

警戒されて無言のままよりはずっとマシだな。

そうしているとニンゲンの女、つうかレイラが何かばやき始めた。腹が減ったらしい。

手持ちの木の実も全部食っちゃったしな、どうしたもんか。

「タクミ様、お食事をご希望ですか？　それでは少しお待ちいただけますか」

「お、おう。待つくらい構わんが」

腹減ったと騒いでるのはオレじゃないしな。待つくらいどうってことない。

しばらくして森に消えたアイリスが戻ってきた。意外と早かったな。

彼女の手には数匹の野ウサギが握られていた。え、この短時間でそんな捕まえたの？

「お待ちせしました。思いの外上手くいきました」

「そうか、それは助かる。ありがとな」

「ええ、こんなにも大猟です」

「お、そうだな」

「すつごく上手にできました」

「う、うん？」

なんか期待するような笑顔でオレを見ているな。頭を突き出しながら上目づかいで。これは褒めてやればいいのか？

「ええと、いい子いい子？」

「わあ！ ありがとうございますすぐ褒美です！ ああ、たまんねえです」

オレがひとしきり頭を撫でてやると、アイリスはトロオンって擬音が聞こえそうなくらい恍惚とした表情になった。

キャラ崩壊早くない？

真面目系だと思ってたんだが、それは早合点だったかもしれない。

こんなやり取りもどこかで女神は見ているんだろう。

そう思うとウンザリした気分一色に塗りつぶされてしまった。

その晩のご飯は肉が食えるってことで、レイラのテンションがヤバかった。

やつとまともな食事にありつける！ なんて叫んでたな。

失礼な、クルミやナッツに謝りなさい。

第10話 誰かあの子を止めて

ムカつくムカつくムーカーツーカー!!

なんだあのクソ転生者、生意気ってもんじゃねえぞ!

お前が美少女とイチヤコラしてる間も、こつちはせつせとスキル制作頑張ってたんだぞ?

そのせつかくのギフトを拒否しやがった挙句に、あの野郎……。

ーおまえ センスないな

なんて返事しやがった!

……いや、『うはうはハーレム』なんてモン寄越した私も悪いと思うけどさ。

インスピレーション湧いたんだから、しょうがないじゃんよ。

つうかタクミはきつと、スキルとか楽勝で生み出せるとか勘違いしてんだらうな。

これ結構難しいんだよ? コントロールできないヤツよ?

火やら水やらの単位元素をバランス良く配合して、私の内なる魔力を適量混ぜて、スキルをしっかりとイメージすることで、ようやく出来る代物よ?

さらに言えば、これは女神の力を分割して付与しているのだから。

すなわち『神の力』と劣化版みたいなもの。

なのでウツカリ強大なスキルを授けてしまうと、その分私は弱まってしまうので、立場が逆転するかもしれない。

かと言ってクソスキルだと選んでもらえないというジレンマ。

あんな扱いにくいヤツは放つといて、新しい転生者を呼び込むか?

……やめておくか。

あと一人なら呼べなくもないけど、次のヤツが使えるタイプだという保証はない。

文字どおりの大博打なわけで、これぐらいの不協和音程度でギャンブルに出るわけにはいかないね。

まあ、とりあえずは魔人王を倒すのが目的なわけで、プロセスなんかどうでも良い。

あのクソ野郎に奪われた力を、早く取り戻さなくては。

……だから期待してるよ、タクミ？

アイリスは良く笑うようになった。

元々そういう子だったのかもしれないが、初対面の時とのギャップに驚かされる。

「タクミ様、今日もお食事ををご用意しました！」

「そ、そうか。今日はオオトンボってやつか？」

「そうですそうです。炒って食べると美味しんですよ。ヤミツキになること請け合いですよ？」

「そうなのか、それは楽しみだな」

オオトンボってのは文字通りでかいトンボだ。

アカトンボというタイプのふた回りくらいでかい種で、魔族のポピュラーな食材なんだとか。

ちなみにどっちも食用らしいが、でかい方が食いがあって好まれるんだとか。

「普段は8匹くらいしか獲れないんですけど頑張りました！ 13匹ですよ13匹！」

「んんーこれはやれって事だよなあ」

「10匹以上獲れるようになったら一人前ってドンガお爺ちゃんもそ

う言っ……」

「はい、良くできました！いいこいいこー」

「はうっ！ ああたまりません。何とかもう、たまりません！」

この調子だ。

レイラには相変わらず距離を取ってるのに、オレとは大体こんな感じだ。

『うはうはハーレム』はちゃんと拒否できてるんだよな？

間違つてアクティブになつてたら笑えねえな。

食材の採集はアイリス、食事の準備はレイラが担当だったようだ。

既に完成していて、辺りは香ばしい匂いが漂っている。

見た目は若干アレだが食欲をそそられる。

では冷めない内にいただくとするか。

「タクミ様、足はペツてしてくださいね。美味しくないのよ」

「これ、カリつとしていけるな。特に羽がサクサクでうまいぞ」

「あーこれおいしいじゃない！ 昨日のウサギといい、食事がまともになるとやる気が出るわね！」

レイラ、お前はナッツ様をこき下ろしすぎだ。

惑星ナッツの住民にさらわれても助けてやらんからな。

「あ、足も一緒に食べちゃってるんですか？ 苦くないですか？」

「いや、この苦味が逆にアクセントになってるぞ。香ばしいだけじゃ飽きそうだし」

「ていうかそもそも硬くて食べられないんだけど。タクミはよく噛み碎けるわね」

「レイラはアゴの力を鍛えた方がいいぞ、クルミの殻を歯で割れるくらいに」

「え、そんな女どうなの。たくましすぎて」

「面白くないか？」

「面白くはあるわ」

そんなハートフルな食事を終えたオレたちは、一路グレンシルへ向かう。

道中は思いの外安全で、ウザい連中に絡まれることも無かった。道すがら、オオトンボをアイリスが捕まえる。

オレに報告に来る。

いいこいいこーしてあげる。

ニコオー！

日暮れの頃に、やはり安全そうなホラ穴をアイリスが見つける。

オレに報告。

いいこいいこー。

ニツコオー！

いや別にいいんだけどさ。

いちいち頭撫でる流れって要るのか？

やってやるまで引き下がらないから撫でてやるけども。

どれだけ距離を隔ててもオレんどこ来るんだよなあ。

ただ、あれだけはいただけない。

その日の夜の事だ。

オレとレイラが交代で見張り番をして、その間に眠る段取りとなった後の事。

アイリスがソワソワしながら近寄ってきた。

「それではタクミ様、もう夜ですので私は夜伽の準備に入ります。どうかお手やらわらかにお願いします」

「お、お前急に何言って……」

「こんな生傷だらけな事はお許してください。それではご一緒に……へブシッ！」

タクミ先輩の教育的指導。

別名、脳天チョップだ。

突然服を脱ぎ始めたから緊急措置ってことで。

つうか子供の身で何言ってるんだ。

大いなる力によって『この世界』ごと消されたいのか？

「アイリス、そういうのは大人がやるもんだ。子供の出る幕じゃない」

「そうですか、わかりました。それでは大人になるまで待ちますね」

「なあ、オレのNOは汲み取ってくれないのか？」

「その変わり寝所は共にさせていただけます。それが私の出来る最大限の譲歩です」

「ちよつと待て、なんで交渉ありきで話が進むんだ」

「ではおやすみなさいませ」

頑なだ。

頑な過ぎる。

これ絶対『うはうは』がアクティブになってるだろ！

あのポンコツ女神め、明日の朝絶対にシメてやるからな！

第11話 領主館へ急行セヨ

翌朝。

目を醒ますと異変に気がついた。

レイラがどこにも見当たらなかった。

最後の交代をするまでは間違いなく居たのだが、アイツに見張りを代わってから姿を見ていない。

また水浴びにでも出かけたと思いつているのだが、一向に戻る気配が無い。

何かトラブルにでも巻き込まれたんだろうか、クソ面倒だが探してみよう。

まずはアイリスに行方を聞いてみた。

「なあ、レイラ知らないか？」

「あのニンゲンなら明け方に男たちに連れていかれましたけど」

「え、そういう事は早く言ってくれないと困るんだが」

「すみません、今後気をつけます。具体的に何が困りますか？」

「そりやお前……、何だろうな？」

あれ、困らないんじゃないか？

つい反射で探そうとしたが、別にオレらは困らないんだし、問題無くないか？

「すまんアイリス。別に困らねえわ」

「そうですか、なら良かったです。てつきりご迷惑をおかけしたかと」

「問題無いから忘れてくれ。じゃあそろそろ出発するか」

「はい、今日もがんばります！」

さあて、スッキリした青空だし、サクサク行くかねー。

……何だアレ？

立ち上がって気づいたが、木の幹に文字が彫られていた。

『レイラ嬢は我らが保護をした。魔人の娘を連れてロツクレアの領主館まで来い』

という文面が、ちょうど目線の高さに彫られている。

残念だったな、その細かい気遣いも完全に空振りだ。

それから荷造りをしている時に、フワリと女神のギフトが飛んできた。

そういえば今日はまだだったな。

えつと『読心術Ⅳ ↓対話時のみ相手の思考を読み切ることが出来る（戦闘時は不可）』というものが送られてきた。

正直すっげえ欲しい！

でもひとまずは戦闘用のスキルを保持しておきたいから、今日もスルー。

だが今回はこれで終わらない。

スキル状況について確認しなくては。

オレは例によってガリガリと大きな文字を地面に書いていく。

不思議に思ったらしいアイリスが話しかけてきた。

「タクミ様、急にどうされました？」

「これはだな。えー、日課の健康法だ。すぐ終わるから待っていてくれ」

「まあ！ それだけお強いのに、健康法までも試されているんですね。素晴らしい事だと思います！」

なんか妙に反響がでかいが、まあいいか。

『神と対話してます』なんて説明をするほうが100倍面倒だ。

気を取り直して、女神へのメッセージを書き記していく。

——この前の うはうはハーレムって機能してんの？

いくらか間が空いてフワリフワリ。

『していないよ、アンタに断られたその日に破棄した。つうかそれは、ナチュラルにモテて困るうーっていう自慢？ 焼き殺すよ？』

うわ、すごえな。

文字の情報しかないはずなのに、感情がドウワツとダダ漏れしてきた。

しかし目星が外れたな、絶対にスキルの差し替えがあったと思ったんだが。

そうすると、この子の暴走に説明がつかないな。

『つうかレイラちゃん、さらわれてんじやん。早く助けに行きなよ』

——いや、別にいいじやん。困らないし。

『……あんたグレンシルまでの道わかんのか？ まだまだ遠いんだよ？』

あ、そういやそうだ。

ここまで全部レイラの道案内。

アイツは道順を知ってるみたいだった。

今後道に迷うのと、今助けに行くの。

どっちが面倒か……。

「しかたねえな。マジで面倒臭えが助けに行くか」

「そうですか。タクミ様を煩わせるなんて、あのニンゲンはあとでケツビンタですね」

黒幕のこと考えると、アイツを助けに行く必要はなさそうなんだから。

『レイラ嬢』だの『領主館』だの書いてあったし、それほぼ答えじゃん。

こうしてオレたちは呼び出しに応じて、領主館へ寄り道をせずに向かった。

道すがら、野良猫と戯れつつ。

立ち止まらなかつたとは言っていない。

その猫は白地に黒ブチの若い子で、お腹が空いているようだった。

足元でしきりにミーミー鳴いている。

手元にはナツツしかないんだけどいいかな？

「タクミ様、猫ちゃんにこのトンボをあげましょう」

「お、まだ持ってたのか。いいじゃないか」

「えっへ、えっへへ！ コレお手柄ですか？」

「お、おう。そうだな」

右手で猫に食べさせて、左手でアイリスを撫でてやる。

なんだこの絵ヅラ？

しばらく猫と遊んで、アイリスなんか頬擦りまでしてから、別れを惜しんだ。

すまん、縁があつたらまた会おう。

それからオレたちは約束の地へ向かった。

何が待ち受けているかわからない、気を引き締めて行こう。

「あ、タクミ様。プイプイ草が繁ってますよ」

「ん、なんだそれ？」

「葉の部分を口に当てて吹くと変な音が鳴るんです」

「へえ、どんな感じだ？」

アイリスが上手にプイイッと鳴らす。
オレも真似を試してみたが、プーっとなってしまう。
おかしいな、プーっ！ プーっ！
アイリスのような可愛らしい音は一向に鳴らない。

「口です。上唇をこう前に出す感じで、下唇を歯からほんの少し離して
みてください」

『ブーぴたぴた。ブーぴたぴたぴた』

「それだと離しすぎですね、もうちよつと近いです」

「フスーっ！ いやこれ難しいぞ？」

「あはは、慣れちゃえば簡単なんですけどね」

ーしばらくして。

「プイイっ！ プウープイプイ！」

「わあー、すごいですタクミ様！ とつてもお上手ですよ！」

「プツプツプー、プイツプウー」

「こんなにバリエーション豊富な音聞いたことないです、タクミ様は
創造力もお持ちなんですね」

「んー、ちっさい頃葉っぱで遊んでたから……とかじゃないか？」

ほぼ覚えてねえけどな。

霞んでモヤがかった、うっすい記憶だけでも。

「さて、そろそろ行くか！」

「はい、参りましょう！」

「……どこに？」

「……どこでしたっけ？」

「んー、小腹が減ったな」

「あ、それならご飯探してきますよー」

「たのむ、他の準備はやっておくから」

こうしてオレたちはトンボやらクルミやらを美味しくいただいた。
それから森で見つけた寝床で横になり、大地の匂いを堪能してか
ら眠りについた。

レイラの事を思い出すのは、翌日の女神との対話まで待つこととな
る。

第12話 交渉下手の会話

「ハツハツハ！ ノコノコと間抜けヅラを引っさげてやってきおつて。レイラ嬢ならば先ほど父君に引き渡したわ」

翌日、オレたちは呼び出された場所に向かった。

今居るのは謁見の間だが、地方領主とは思えない程ご立派なものだ。

屈強な兵士たちを左右に従えながら、小太りの領主が引きつった笑い声をあげている。

そのセリフは昨日のうちに言いたかったよな？

丸一日放置して悪かった。

今朝に女神から声かけられてからやってきたからな。

ちなみに今日の女神のギフトは『これで安心、脳内メモ帳☆ うっかりさんの為のタスク管理』なんてもん寄越してきた。

はっ倒すぞ。

「居ないなら別にいい。地図の一枚もくれたら有難いが」

「そうだろうそうだろう、貴様はあのご令嬢と二度と会う事は叶わぬ……え？」

「いや、地図くれ。レイラの事はどうでも」

何か気まずい空気が辺りを支配した。

互いに「え？」「え？」の応酬だ。

「タクミ様、この醜いニンゲンは悔しがって欲しいのでは？」

「悔しい？ 何に対してだ？」

「クソツ！まさか罠だったとは……レイラを返せ！ とかじゃないですかね」

「くそおーワナだったんかい。ちくしょーウソつきいー」

「この状況下で煽る心を忘れないだなんて、タクミ様は最高です！」

小太りおっさん領主が椅子をグラつかせる程に、怒りで震え始めた。

その振動に呼応してアゴ肉がプルプル踊り出す。

あ、それやめて笑っちゃう。

アゴ肉ってオレのツボになってんだよ。

「ふざけた男だ……、まあ良い。衛兵、そのこ汚いガキを連れて行け」「ハッ！ 承知致しました」

アイリスへと無造作に伸ばされる兵士の腕。

オレはそれを横から掴んで、ドアノブを捻る要領でクルツと回した。

すると男はキレイに3回転半の宙返りをした後、地面に倒れた。

悪い、加減を間違えたな。

関節増やしちやつてごめんよ。

それを見た周りの兵士が抜刀し、オレたちをグルリと囲み始める。

「貴様、歯向かうのか！」

「歯向かうも何も、なんのつもりだ。お前らこそ笑えない冗談はやめろ」

にらみ合いを続けていると、小太りが尊大な声を投げかけた。

「拒否権があるとも思うのか？ 令嬢の誘拐犯であり、魔人を匿う

叛逆者の貴様は縄を打たれる。今では希少な魔人のガキは首を打たれて中央に献上する。これはもう決定した事なのだ」

「随分と一方的な話だな。お前交渉事が下手だろ」

「なんとでもホザクがいい。結末は変わらんのだからな」

確かに状況はあまり良くないだろう。

何十もの剣や槍の先がオレたちを囲み、逃げ場が見当たらない。アイリスまで守りきろうとしたら、厳しいかもしれない。

「アイリス、とりあえず逃げるぞ」

「わかりました。足手まといにならないように注意します」

言い終わるのを待たずに、出口側を固めていた兵の一団に向けて風魔法を浴びせた。

横一文字に吹き付ける暴風が、重装備な兵士を余す事なく吹き飛ばす。

あと妙に高そうな壺や絨毯もついでに。

そうして血路を開いたオレたちは謁見の間を飛び出した。

無傷の兵やコブトリがそれに続いてくる。

いくつもの扉を抜けて中庭に出ると、目の前には数え切れない兵士が待ち構えていた。

大きな盾を一行に並べて、その隙間には槍を構えた兵士と魔術師が多数見える。

後ろから迫るコブトリ達との挟み撃ちに追い込まれてしまった。

「殺してしまつて構わん、魔法放て！」

その号令で魔術師たちが一齐に火魔法を唱えた。

数々の炎の渦がオレたちに迫り来る。

だが、『危機感』を抱く前に『既視感』を覚えた。

こんな事、前にもあったような。

いや……、確かに『それ』はあったぞ。



——お前も殺されるぞ。間違ひなくな。

な、何を言っているんだ。どうしてオレが殺されなくちゃならな
いんだ。

――まだわからないのか。そこまでの力を持ったお前を、人間や女
神が認める訳ないだろう。

そんハズはない。この期に及んでデタラメを言うな！

――じゃあこの見計らったかのような砲撃はなんだ。この大火、お
前ごと殺すつもりじゃないか。

いや、しかし……。

周りは確かに火の海で、全てを飲み込もうとしていた。
普通に考えたら助からないだろう。

――このまま殺されたんじゃ奴らの思う壺だ。この戦いは壮大な
喜劇として、永遠に記録に残るだろうな。

じゃあどうしろって言うんだ！ もう打つ手なんかないだろう
が！

――オレに考えがある。うまくいけば人間だけじゃなく、女神すら
騙して転生できるだろう。

相手の提案にだいぶ迷ったが、結局呑んだんだった。

誰かの罠に嵌まって死につ放しなんて嫌だからな。

……わかった。お前の案に乗ろう。

――オレの力をやるから、魔族を頼んだぞ。ついでに数々の魔人
の知識と、オレの性癖もくれてやる。

最後のはいらん、どうやるんだ？

◆
そうだった。

オレには『記憶の男』の力が宿っているのだ。

迫る炎に向けて両手を突き出して、大いに叫んだ。

これから始まる初陣を祝って。

「穿て 炎龍！」

放たれたのは巨大な龍をかたどった炎で、瞬く間に目の前の兵士を飲み込んで、灰にしてしまった。

炎龍はその場に留まる事はなく、館の壁を吹き飛ばし、遠くの山の地形を変えて、彼方へと一直線に飛んで行った。

この技は使いどころを間違えると危ないな、意図しない結果になりそうだ。

そうやってできた穴を抜けて、オレたちは危機を脱したのだった。館は絶賛炎上中だったおかげで追っ手が来る事もなく、割とゆつたりしながらの離脱だ。

ひとまず森の中へ入り、そこに腰を落ち着ける事にした。切り株に座って休んでいると、アイリスが突然飛びついてきた。

……嗚咽を漏らしながら。

どうやらいつもの暴走の様に、じゃれついて来た訳じゃ無さそうだ。

「魔人王様です！ 何度も何度も聞かされ続けたあの御技！ もしやとは思っていましたが、やはりあなた様は魔人王様でした！」

「……魔人王のものなのか。この力は」

「お待ちしておりました、何代も、何代も、あなた様の再臨を！ ニンゲンに滅ぼされようとする日々に、屈辱に耐えながらただじつと、この日を待ち続けておりました！」

「魔人王、か」

オレの胸で泣き続けるアイリス、気が済むまで泣くといい。

弾圧され続ける毎日に、神輿が戻ってきたのは嬉しい事だろう。

そして、オレの記憶にも変化が訪れた。

いくつものパズルがはまっていくような、導線が繋がっていくような不思議な感覚だ。

これは魔人の知識とやらか、それともオレの失った記憶群なのか。

オレは……

オレは……！

オレは、病的な太ももフェチだ。

この話題を持ち出すと『細くてスラッとした足が好きなんだろう』などと言われる事があるが、勘違いも甚だしい。

ほどほどに肉付きをしたもっちりとした質感と、柔らかな曲線が重要なのだ。

断じて細い足が至高で無い事を念頭に置いて聞いて欲しいものだ。膝枕について勘違いが蔓延しているのも不満である。

なぜ膝を折りたたんで迎え入れるのか、理解に苦しむ。

それでは折角の柔らかさが半減してしまい、魅力も大いに下がる。足を伸ばせと！ なぜそれに気づかないのか！

って、オイイイー！

なんだこの記憶は！ あの野郎が言ってた性癖ってヤツなのか?! 有用な情報を思い出す前にフェチズムが浮かぶって、どんだけ固執してたんだ！

これは断じてオレの記憶じゃない、魔人王のしょうもない劣情だ。はい、オレ悪くねえ。

しばらく森で休んでいると、懐かしい顔と再会した。レイラだ。

なんかちよつとスス塗れの。

父親に連れ戻されかけた途中で爆発騒ぎがあつて、どさくさに紛れて逃げ出したんだとか。

へ……へえー、それは災難でしたね。

「もうほんと驚いたあー。いきなりよ、いきなり！ あの爆発が直撃してたらと思うとゾツとするわ」

「そ、そうか。物騒な世の中だな。オレたちも気をつけるか」

こうして3人組の旅が再開される事となった。

マジであの力を奮う時は気を付けよう。

オレは固く心に誓いを立てた。

第13話

セルフ・取扱説明書

「第1回 このままでもいいのか？ レイラさんの扱いが悪いぞ討論会！ パチパチパチー！」

「なんか始まったぞ」

「第1回っていう事はそれ以降もあるんでしようか？」

「そうね、私の心の中ではすでに第5回まで催されたわ」

「そうか、闇が深いな」

「誰のせいよ？」

あれからグレンシルに向けて旅をしている。

地図係が戻ったおかげである。

今現在とはいうと、朝食を食べ終わった食休み中だ。

これから昼くらいまで二度寝したい所だが、ヒロインぶった女がそれを許さない。

「あのね、私ってもう少しチャホヤされていいと思うの！ だって美少女よ？ 外見もホラ、露出ばっちりよ？ こんな私を見てどう思う？」

「寒そうです」

「そんな装備じゃこの大陸でやっていけねえぜ」

「ああ、もう……そうじゃない！ タクミは思春期の男子でしょ？」

「ホラ何か別のコメントあるでしょう？」

ーオレは、病的な太ももフェチだ。

ほどほどに肉付きをしたもっちりとした質感と、柔らかな曲線が重要なのだ。

出てくんなよ性癖この野郎！

ほんとロクな知識出さねえな魔人王は。

「そもそも私は、タクミ様とレイラの出会いを知りません。経緯を聞かせてください」

「えーとだな、オレが部屋で寝てたらドアを破壊して乗り込んできた」
「賊徒じゃないですか」

「こいつを家に送り返したら一悶着あつて旅に出ざるを得なくなつた、あと誘拐犯にされた」

「疫病神じゃないですか」

「それから金が無いとボヤいたり。『でっかい目的を持とう』なんて、そそのかしてきたり」

「擁護すべき点が見当たらないのですが」

「だ、そうだが？」

「ハイスミマセン……」

先ほどまでの威勢はどこへやら、すんごい小さくなってる。

少し可哀想な気がしないでもないが、コイツは調子に乗せちやいけないタイプだ。

とんでもない暴拳に出る前にブレーキをかけて置かなくてはいけない。

「でもさあ、もうちよつとあるでしょ？ 適正なポジションがさあ」

「適正だったってな、役割で自然と定まるもんだろ。お前は『何をする人』になるつもりだ？」

オレがそう言う途端にモジモジし始めた。

すつげえ嫌な予感がするのはオレだけか？

「あのね、そんなたくさんはダメだけど……ちよつとくらいなら、エツチな事してあげても」

「要るかボケ、焼くぞ」

「出しやばらないでください。その役目は未来の私が請け負ったものです」

「これだもんなあー」

結局その後も建設的な意見は出てこず、議題は保留となった。第2回が起こらない事を祈るばかりだ。

果てしなく無駄な時間だからな。

そう言えば今日はまだ女神から連絡がないな。

もしかして忘れてるのか？

地面に『痴呆女神、今日のスキル忘れてるぞ』と煽ってみたものの返事が無かった。

やっぱりオレが『魔人王』であることが原因だろうか。

女神の対立軸の存在みたいだからな、今後アイツは敵になるかもしれない。

まあ……その時はその時だな。

「え、嘘でしょ?」

私は思わず声を漏らしていた。

視線の先にはタクミをフォーカスしたモニターがある。

その光景を見て愕然としてしまった。

魔人王の力の一端がハッキリと映し出されたのだ。

魔人王の復活時期を計算してタクミを地上に送り込んだのだが、ア

イツが魔人王だった……?!

いや、そんなハズはない。

前回の転生の時には一騎打ちの果てに相打ちとなったのだ。

だから魔人王とタクミは別人物である事は間違いない。

そうになると、何かイレギュラーが起きた事になるが……。

もしかして、憑依の秘術か？

それは対象者に力や知識を与える魔法だ。

魔人どもがどの程度まで憑依を使いこなせていたか、今は知る術もない。

だがその秘術でタクミに直接干渉したとしたら、これまでの事にも納得がいく。

なぜ、スキル以上の力を持っていたか。

なぜ、人間が魔人王の技を使えたのか。

そこまで考えて、大変な事に気づいた。

対魔人王用に送り込んだ転生者が、魔人側に取り込まれてしまった。

このままではマズイ、新たに誰かを送り込まなくては。

「転生者、次の転生者を準備しなきゃ！」

一人しかいないこの空間で、私の発言に反応するものはいない。

それでも自分に言い聞かせるように、言葉は漏れ続けた。

この状況下でさらに力を分配することは痛手だが、そうも言っていない。

私は心の中で決心をした。

転生者であり、魔人王となったタクミを殺すことを。

第14話 商人の手癖

ロックレアを抜け出したオレたちは、人目を忍ぶように森の中を進んだ。

単純に食材が見つかりやすいつて理由もあるが、追っ手を警戒してのことだった。

撃退するのは訳無いのだが、面倒ごとの最小値を選択しなかった。その道中で「第2回 レイラさんの扱いナンタラ討論会」が催されたが、クソどうでもいいな。

そんな旅を3日も続けると次の街のエリアに差し掛かった。

コモゾークと呼ばれる地方都市で、グレンシル地方に最も近い場所だそうだ。

もうしばらく進むと目的地に辿り着くわけだ。

人間の手で廃墟にされてしまった故郷をアイリスに見せて良いものかどうか、少し悩ましい。

かといって人間の世界で生きる場所なんかないしな、お尋ね者になつただろうオレも、魔人のアイリスも。

ちなみに女神からはあの日以来音信不通だった。散々に煽ってみたのだが、まさに音沙汰なしだ。

「母さんも心配している、連絡くらい寄越しなさい」と情に訴えてもみたが、ダメだった。

あの女神が何を考えてるか気になるが、こうなつては知る術もない。

考えないようにするしかなかった。

森を進んでいると、街道に近づいたのか周囲が開けてきた。

道に目をやりながらレイラが言った。

「このまま森を進むと山道なっちゃうから、街道を進んで山を迂回し

ましよう」

「確かに向こうに大きめの山が見えるな。登山は厳しいか？」

「聞いた話になっちゃうけど、道は険しく敵性生物も多いらしいわ」
「あ、それめんどい。街道を進むか」

労力の最低値を手早く比較した結果、森から出ることにした。

左右に木々の茂っている下り坂の道を進む。

こちらが高台になっているのか、遠くにコモゾークらしき街が霞んで見えた。

あの街も入らないほうが安全なんだろうな、追っ手がいないとも限らない。

「タクミ様、気をつけて下さい。どこかで戦闘が起きているようです」

「そうか、近いのか？」

「たぶんですが、この道を進んだ先だと思えます」

アイリスは目と耳がオレたちよりも優れている。

道理で狩りが図抜けて上手いはずだ。

オレも真似して動物を狩ってみたが、なかなか獲物を見つける事ができなかつたもんだ。

しばらく歩いていけると、荷馬車を囲んでいる集団に出くわした。

どうやらその集団は賊徒か何かで、荷馬車は商人のものだろう。

賊徒はおよそ30人くらいで、商人側は護衛らしき5人が居て必死の防戦をしていた。

あの様子では荷物を奪われるのも時間の問題だろうな。

「タクミ、大変よ！ 人が襲われてる」

「ふーん、そう」

「え、助けないの？」

「なんで助けなきゃいけないの？」

「……可哀想じゃないの？」

「なんとも思わないの」

「ああ、そうだったわね。アンタってそういうヤツだったわ」

そう、オレは面倒が大嫌い。

困ってる人がいても平気で見捨てちやう。

オレが手を出さなくても、どつかのヒーロー気質なヤツが助けるっしよ、ヘーキヘーキ。

ちよつと通りますよーってノリで脇をすり抜けようとしたが、数人が目の前を塞いだ。

なんだお前ら、そこ邪魔なんですけど。

そいつらの右側も左側にも避けようとしたが、その度に剣先を突きつけて阻もうとする。

あー、これは介入させられる流れだ。

「てめえ、随分良い女を連れてると思ったら魔人のガキまで連れてるじゃねえか！ 黙ってソイツらを置いていけ、死にたくなけりやな！」

「ね、ね、タクミ！ 良い女だってイイオンナ！」

「黙ってるウザ女。本当に良い女はちよつと褒められたくらいじゃ喜ばねえよ」

「賊徒ごときに褒められて喜ぶなんて有りえないわね。良識を疑うわ」

オレはお前の良識を疑いたいよ、レイラ。

その風切り音がしそうな程の手のひら返しはなんなんだ。

「なめやがって……オレたちは天下無敵のギゾク、最強無敵団だ！

甘く見た事を後悔させてやるからな」

「すごい組織名ですね。高い高熱みたいな」

「つうか義賊の意味知らないだろ。義賊先輩が聞いたらブチキレルぞ」

「ねえ、コイツらやつちゃうんでしょ？ 私にやらせてよ」

おいレイラ、怖い事サラツと言うなよ、アマゾネスかお前は。冗談を言ったわけじゃないらしく、魔法の詠唱に入っている。もう問答無用ってやつだ。

「後悔しても遅いからね！ フリーズキャスケット！」

レイラが魔法を唱えると、目の前にいた男たちの足元が凍りついた。

四角い箱型の氷塊で両足を固められ、バランスを崩した男たちがその場に倒れた。

荷馬車を囲んでいた連中にも魔法をかけて、大半が同じ様に転がった。

難を逃れた数人も、商人の護衛に斬られている。

「さあ、降参する？ そのままで居ると足が腐って使い物にならなくなるわよ！ 降参して武装解除するなら解いてあげるわ」

「なんというか、えげつないですね」

「お前初の魔法戦なら、ズバーツ バリバリーってやれよ」

「あれ、大不評?!」

それから間もなく連中は投降し、魔法を解く代わりに両手足を縛り付けた。

組織名も『微笑みのホワホワ団』に変えさせた。

これで言葉の重複をバカにされることはない、良かったな。

そうしているうちに、護衛に守られる様にして雇い主らしき人間が近寄ってきた。

金色でツヤのある長い金髪の、眼鏡をつけた細身のワンピースを身に纏った女。

歳もオレより多少上なくらいか、20代前半くらいだろう。

商人というよりは、事務方やマネージャーといった印象を受ける。

「もうダメかと思いましたが、助かりました！ 私はこの辺りで行商をしているシスティアと申します」

「気にすんな、降りかかった火の粉を払っただけだ」

「それにしてもお強いですね。あの人数を全く歯牙にかけてませんでした」

「あー、たまたまだ。幸運が重なっただけだ」

「フムフム、異様な強さ。フム、お世辞に対しては気を良くしない、フムフム」

システィアと名乗った商人は、ピントの合っていない目線を宙空に漂わせながら独り言を言い始めた。

右手は2本指、5本指、3本指と目まぐるしく形を変えている。

計算をしているのか、それとも記憶術か何かだろうか。

会話中にやられるとうつとおしいな。

「しかも魔人のお嬢さんをお連れですね、コモゾーク周辺に居るなんて聞いたことありませんが」

「おい、あまり詮索をするな。敵対でもしたいのか？」

「とんでもない！ 私は根っからの商売人でして、商機に敏感なだけですよ」

「オレたちの邪魔だけはするなよ、今後縁があるかは知らんがな」

「私としては護衛などをお願いしたいんですが、どうでしょう？ 今なら恋人粹だつて空いてますよ？」

「めんどい、だるい、興味ない」

オレの返答を聞いて、また独り言を呟き始めた。

無関心タイプ、割と冷血、色仕掛けは効かない、とか言ってるようだ。

その癖が商機を遠ざけてるぞ。

教えないけどな。

何かお礼を、と言うので食料を分けてもらった。

その申し出をした時もブツブツ言ってた。

オレはつつこまんからな。

「名残惜しいですが本日はこの辺で。コモゾークのシステイアをお忘れなく！」

「あいよ。覚えておいてやるよ、忘れるまではな」

別れの言葉を背中で聞き流してその場を離れた。

無駄な時間を食ったが、食料が手に入ったのはラツキーだったな。

レイラの喜びようが異様だが、それはシレッツとスルー。

それからコモゾークの街は通過して、グレンシルへの道を進んだ。

その時オレたちは新たな出会いをする事となった。

新たに送られてきた転生者と。

第15話

第2の転生者 リョーガ

ー「タクミ、まさかアンタが魔人王だったなんてね。すっかり騙されたわ。」

女神から久々の連絡が入った。

オレは手頃な棒切れを見つけて地面に返答を書き始めた。

『連絡くらい寄越しなさい。母さんも心配している』

ー「誰だよアンタ。念の為聞いておくけど、魔人王の力をアタシに返す気ある？」

『これってお前の力なのか？』

ー「どういう原理かはわからないけど、私が持つ【十指の力】のうち2指が魔人王に奪われたの。それを返して欲しいだけ。」

『どうやって返せばいいんだ？』

ー「アンタの魂を封印石っていう石の中に入れる。現地時間で5年くらいかな。それが済んだら解放してあげる、どう？」

この話が本当なら返すべきなんだろうな。

何があったか知らねえが、泥棒みたいなもんだし。

そう思いはしたが、先日の事が頭をよぎった。

幼い嗚咽や涙とともに。

「あなたの事をお待ちしておりました、何代も、何代も！」

5年かー……。

そんだけアイリスたちを放置したら、ますます危ない思いをするよな。

そもそも魔人王の力を返したら連中を守ったりしてやれないし。

その状態になっても頭痛に襲われたら大変だ。

あの痛みが続くようなら自殺でもしかねんぞ。

オレは決意を固めて書き記した。

『悪いな、状況から言って返すわけにはいかん』

ー「そう、残念ね。アンタのこと嫌いじゃなかったけど、こうなっ

たら仕方ないわ。リヨーガ、行きなさい！

その言葉を合図に、目の前の道が楕円形に輝きだした。

その光は人の足をかたどったかと思うと、腿、胴、腕、肩、頭と、人型の塊となる。

そして眩く閃いて辺りを白く染め上げた。

再び視界が戻った頃、既に一人の男が現れた後だった。

筋肉質で無骨な外見は、見た目からして手強そうだ。

側から見たら、オレよりずっと戦い慣れしてるように映るのだろう。

女神からの刺客。

オレは片時も目を離さなかった。

——そいつは転生者のリヨーガ。3指の力を持った、ね。2指しか持たないタクミに勝てる？

『魔人王とあわせて4指だ』

——使いこなせてるなら4指だけど、どこまで扱えてるのかしら？
さあ、やっておしまい！

言われてみればその通りだ。

まだ『炎龍』と『性癖』くらいしか自覚できてる記憶はない。
こんな体勢でどこまでやれるのか。

……ん？

身じろぎするだけで、かかって来ないんだが。

歴戦の傭兵みたいな顔が眉間にシワを作りつつ、赤くなったり青くなったり。

スキルのせい、とかじゃないよな？

「おい、お前や」

「……ヒェー」

ズダァン!

「ーえええええ!? 何それー!」

『なあ、何もしてないのに倒れたんだが。そういう技か?』

「ー知らないわよ! メチャクチャ強そうだから選んだつてのに、
どういう事よ!」

「知らん、オレに言うなよ。」

「つうか『どういう事』なのはオレが聞きたい。」

「ねえタクミ。すごい演出の後に泡吹いて倒れたコイツはなんなの?
?」

「オレが知ってると思うか?」

「ごめん、知るはずないよね」

「タクミ様、これからどうされますか?」

「どうするつたつて、うーん。」

「どうすりゃいい?」

「とりあえず話を聞くために木陰で介抱することにした。」

「念の為武器は預かって。」

しばらく待っていると、地獄の亡者のような顔が、苦悶の塊のよう
な表情になって目覚めた。

「確かに見た目だけなら強そうだ。」

「えっと、女神が寄越してきた転生者で間違いないよな?」

「スイマセン、多分そうだと思います。夢の様な世界で誰かに命令さ
れて、ここへやってきました」

「白い部屋だったろ、オレも同じ転生者だから知ってる」

「スイマセン、まさか先輩だとは露知らずご無礼を。何分右も左もわ
かりませんので」

「テンセーシャって何よ?」

「タクミ様がその様な種族であるなら、私もなりたいです。私もテンセーシャにしてください」

うん、君たちちよつと黙ってて。

今大人の話をしてるから。

転生者について知りたい?

わかったわかった、後でしてやるよ。

近いうちに説明するとは言っていない。

「アンタさあ、そんな凶体して強そうなのに、なんでいきなり倒れちやっただの? すんごい敵が来たのかと思ったわ」

「ハイ、私は争い事が嫌いと言いますか、人が怖いと言いますか、あの時も頭が真っ白でして……」

「へえ、そんな怖い顔してるのに随分と小心者……」

「顔の事は言わないでくださいよおーっ!」

怒鳴り声を上げたリョーガが地面を叩くと、大地が大きく揺れた。

地面はひび割れてへこんでしまい、発信源を中心にクレーターのようなものが生み出された。

こいつ、低姿勢のクセにとんでもない力を持ってんじやねえか。

「とりあえず落ち着け、レイラは早く謝れ!」

「ごめんなさい! 怒らせる気はなかったの、本当にごめんなさい!」

「はあ、はあ、スイマセン。こちらこそ声を荒げたりなんかして」

「いや、大声よりも気にすべきもんがあるけどな」

とにかく情報が必要だな。

オレは出来立てのクレーターから飛び出して、地面に質問を書き出した。

『こいつのスキルって何なの？ あとコイツ何なの？』

返答に迷ったのか、多少のタイムラグの後に答えが返ってきた。

——そいつのは「超人Ⅳ」よ。単純に筋力や反応速度とか身体能力がとんでもなく増大するスキル。素の筋力や体格は申し分なかったんだけど、志向が致命的だったわね。

なにそのスキル、すげえ欲しい。

メモ帳とかハーレムとか送ってないで、そういう使えるヤツを寄越せつつの。

まあそれも今更な話か。

——今回は失敗したけど、その力はいずれ返してもらおうからね！
じゃあね！

そんな捨て台詞を吐いていった。

頑張ってるよとこ悪いが、女神に出し抜かれる気がしない。

たぶん詰めが甘いタイプなんだろう。

どっか肝心なところが抜け落ちてんだよな。

さて、そうするとリョーガの処遇を決めないと。

敵対しないなら放置してもいいけど、どうしたもんか。

こういうのは本人に聞くに限る。

「さて、オレたちはこれから魔人の拠点だった所に向かうんだが。お前はこれからどうする？」

「スイマセン、事前知識もなく、この世界の事はサツパリです。先輩に付いていかせてもらいたいです」

「先輩はやめてくれ。オレはタクミっていうんだ」

「スイマセン、名前を知らませんでしたので。邪魔にはならないよう気をつけますので、どうか」

「まあ、いいだろう。極力感情を昂ぶらせるなよっ」

「ハイ、気をつけます……」

こうしてまた旅の仲間が加わった。

丁寧仕立ての不発弾と言うべきか、休憩中の活火山と見るべきか。

魔人王、残念魔術師、暴走娘、人間兵器という歪な小集団は動き始めた。

かつて魔人王が築いた、魔人たちの聖地と呼ばれる『アシユレリタ』へ。

第16話 甘えたいお年頃

リョーガの暴れっぷりを目の前で見せつけられたせいだろうか。アイリスがすっかり怯えてしまってる。

自分を虐げてきた人間族の仕業だつてのもあるだろうし、インパクトも強烈だったもんな。

それに顔も怖いし……エツフンエフン。

あれからというものの、天真爛漫だった少女はちよつと元気がない。歩く時も休んでる時も、寝る時も目が覚めた時も、ずっとオレの服の裾を掴んでいる。

それを許している間は落ち着くようで問題無いのだが、離そうもんなら大変だ。

途端に泣きそうな顔をして飛びついてくる。

そうなると泣き止むまで頭を撫でてやらねばならない。いつから保護者になつたんだつつの。

オレがトイレに出たから離れた時の事なんか、戻った時が大変だった。

アイリスが両手を伸ばしながら、フラリフラリとオレの元に歩いてきた。

さすがに『あんよが上手』をやられるとは想定外だったぞ。

「タクミ様あー、見捨てないでくださいー。置いていかないでくださいー」

「便所だよ！ こればっかりはしようがねえだろ」

「そんな……、それしきの事で私は！ 離れ離れになんかなりたくはありません！」

「おい、人の羞恥心越しに謎要求すんな」

このザマだよ、全く。

万事こんな調子で、オレが居ないと情緒不安定になつてしまう。

その代わりというか、そばに居さえすれば落ち着いてくれる。

ついさつきもそうだ、地面に座ってるオレの膝の上。
猫のようにゴロンと体ごと甘えてきた。

オレと目が合うとニコツと微笑んでくるんだが。
いや、ニコオじゃなくて。

オレってお前らにとつて王様なんじゃないの？
ほら、敬意を持って接するべきじゃないのか？

まあ本人はどこ吹く風、都合の悪い話はシレッと流しやがる。

そしてただでさえ面倒な事態なのに、どつかからやる気を出した空
気読めないのが一人。

やっぱレイラだ。

急接近しているように誤認した阿呆は、空回りという名のアピール
をし始めたのだ。

その悲劇は食事どきに起きた。

何故か料理が異様に上手いリョーガが用意してくれたスープと、ア
イリスのオオトンボを食べようとしたんだが。

右にアイリス、左にレイラがオレに寄り添うように座って、二人同
時にスプーンをオレに差し出してきた。

「タクミ、あーんして。飲ませてあげるから」

「タクミ様、私のお飲みください。こっちの方が美味しいです」

「味ならこっちの方がずっと美味しいわよ、そりやもう舌が破裂する
くらい」

「絶対私の方がずっと良いです。飲んだらその、骨という骨が溶け
ます」

こえーよ、料理に使うキーワードじゃないだろ。

拷問でもする気なのか？

作ったりリョーガがすごく寂しそうな雰囲気出してんだろうが。

結局、二人がかりで飲まされた。

そして話はそこで終わらない。

飲んだら飲んだで、二人が口を開けて待ちの姿勢になる。
ヒナドリかよ。

2本のスプーンを受け取って二人同時に飲ませる。
飲まされる。

飲ませる。

飲まされる。

……アホかと。

効率最悪じゃねえか、後半はスープ冷め切ってたぞ。
そんなオレを見てリョーガがポツリ。

「タクミさんはモテるんですね。羨ましいですなあ」

「本当にそう思うか？」

「ハイ、正直大変そうだなとも思いますが」

「なんならポジション譲ってやろうか？」

「スイマセン、そればかりはご勘弁を……」

またお手本のような拒否だな、傍観してないで助けろつつの。

これがいつまで続くかと思うと、別の意味で頭が痛くなる。

こんな精神状態で、打ち捨てられた故郷をアイリスに見せて良いの
だろうか。

どれだけ考えても答えが見えてこない。

だが、悩んだとしても他に行く宛てはない。

心の暗雲を気かけながらも、着実に目的地へと歩を進めるのだっ
た。

第17話 男はケツで語る

とうとうオレたちは着いてしまった。

グレンシルにある、アイリスの故郷へ。

広い意味ではオレもそうなんだろうが、あまり実感は沸いていない。

だから感慨深さも何もないのだが。

アイリスはやはり違った。

「酷いわね、ただのガレキの山じゃない」

「執拗というか徹底的というか。よほど人間と魔人は仲が悪いんだな」

そこには建物の跡も何もない、焼け野原だった。

かろうじて残った石畳に育ち始めた雑草が、より一層廃墟であることを能弁に語る。

ここまで来れば同族の数人も居るだろうと思っていたが、すっかり当てが外れたな。

慰めにもならんだろうが、うつむいているアイリスの肩をそっと抱きしめた。

「それでどうするの？　ここでじっとしていても仕方ないと思うけど」

「どうするって言われてもな。他に行く当ても無けりやここでの用事も無い」

「ハイ、本当に何もありませんからね、途方に暮れてしまいますね」

『……誰かー。誰かおらんかー……』

なんだ今の声。

もしかして亡都に彷徨う幽霊とか？

昼間なのにそういうのって出るのかよ。

『おおーい、助けてくれー!』

「あっちよ、誰かの声がする!」

「マジかよ、生き残りか?」

声の主を探しに行くと、確かにそれは居た。

下半身だけで地面に現れた何かが。

魔人の国にはケツで喋る生き物がいるのか?

「そこに誰かいるんじゃない? 助けてくれい!」

「わかったわ。リヨーガ手伝って」

「ハイ、わかりました」

「助けるってなんだよ?」

二人が足の先を引っ張ると、地面からおっさんの上半身が飛び出してきた。

単純に上半身がガレキに埋まってただけか。

そうだよな、ケツで喋る生き物なんかいるわけねえよな。

「いやあ、助かった。このままおっ死んじまうのかと冷や汗をかいたわ」

「ドンガ爺? ドンガ爺ですよね!」

「おお、アイリス、無事だったか! さらわれたと聞いて心配しとったぞ!」

「生きててくれたんですね、良かった! みんな死んじやったかなって」

「大丈夫じゃ、魔人はしぶといんじゃないよ。ここにはおらんが、あちこちに隠れ住んどるよ」

このドンガという爺さんも魔族なのか。

頭が禿げ上がって赤い髪かわかんないけど。

あ、眉毛がちよつとそれっぽいな。
それからオレたちはこれまでの話をした。
主にお喋り好きのレイラが、そして補足するようにアイリスが。
鷹揚にうなずいてた爺さんがオレに鋭い目線を投げつけた。

「お前さんが新しい魔人王様かね。見た所人間のようじゃが、この子が嘘をついてるとも思えん」

「嘘か本当かは、いずれわかるだろ。嘘だったら力を持ってないホラ吹きって事なんだし」

「違い無いの。で、これからどうするつもりじゃ?」

「うーん、それなんだけどな。ここにもう一度街を作るのは無理か?」

アイリスや魔人を助け、オレものんびり過ごす為の最良の案だ。

ここでそれなりの街を作ってしまうえば、魔人たちもっこり、オレもにっこりできる。

ましてやオレは王様らしいし、あらゆる面倒事を手下に投げる事ができる。

完璧なライフプランだ。

「確かにここに拠点を作れば、散らばった魔人たちも戻ってくるじやろうが。同時に人間の軍隊も相手にせねばならん」

「あーそんなことか簡単簡単」

それじゃあせつかくだから派手に行くか、始まりの合図って感じだな。

紙にサラサラつとこう、檄文をだな。

よし完成、あとは宣伝を残すだけだ。

「リョーガ。お前はひとつ走りコモゾークの商人システイアにこれを渡してきてくれ」

「ハイ、お渡しするだけで良いのですか?」

「そうだ。渡すだけで良い。アイツならそれで巧くやってくれる」
「コモゾークってひとつ走りで行ける距離だっけ？」

知らん。

つうかコイツならやれるだろ。

まあ早かろうが遅かろうが構わんがな。

さてと、人間様の軍をお迎えする準備でも始めますかね。

オレはこれから起きるだろう大イベントに心を震わせたのだった。

第18話 再建の第一歩

魔人の街アシュレリターー。

かつては1000人も魔人が住む一大拠点にして、彼らの王の住まう地であつたとか。

海や大地の恵みに感謝し、よく耕し大いに育み、激化する人間との軋轢を数百年耐え続けた愛すべき聖地。

城壁は高く、兵は強く、王は公平であり、下々の者は心を安らげて暮らしていた。

かといって前線基地のような武張ったところのない、木々や花々はもちろん、芸術や装飾も重視されていた美しき都。

爺さんが言うには、かつてはそんな場所だったらしい。

今はというと、ガレキだらけの人っ子一人住んでない焼け野原。

城壁どころか視界を遮るもの的一切ない平坦な大地。

ここに住まうものと言え、目の前にいるケツジジイくらいなもの。

まばらに生えている雑草は、草花と呼ぶにはかなり無理がある。

かつての華やかさが皮肉に思えるくらい、現状は散々だった。

「それでお前さん方、ひよつとしてここに腰を据えるつもりかね？」

「そうするつもりだ。その為にリョーガに使いを頼んだし」

「何を企んでいるかは知らんがの。もしここに住むと言うのならワシが家を用意するが」

「そんな事できんの？ マジで頼むわ」

「その代わり組み立てだけ。建材の用意となると専門外じゃ」

「建材ってことは木とか石とかか？」

そう言ってドンガは地面に描き始めた。

石はこんな形とサイズ、木はこんな形といった具合に。

つまりはオレたちで前準備をしなきゃいけないと、めんどくさつ。

話し合った結果、オレが原木や岩を集める。

レイラが魔法で裁断する。
アイリスはその間に食料確保。
ジジイはガレキの下敷きになった地下室に用があるらしい。
だから上半身だけ埋まっていたのか。
実際に作業して思った、オレは安請け合いしてしまったと。
原木抱えるのも岩を持ち運ぶのもしんどい。
肩やら腰やらが悲鳴をあげている。
これを台車無しで運ぶなんて文明人のすることじゃない。

「あーしんどい、死ぬ。マジで死んじゃうこれ」
「シレッと両手に大木と岩石を持つてるけど、どっちも余裕で人を殺せるサイズじゃない？」
「そんな考察はどうでもいい。おらよ、これで建材作れ」
「はい、お疲れ様。まだ全然足りてないから、あと2往復くらいしてきたら？」

鬼かこの野郎！

他人事だと思つて滑らかに頼みやがつて。

この仕事片付いたらオレは何もしねえからなクソが。
レイラはというと、風魔法を巧みに操つて枝を落したりしている。

いいなそれ、オレもそつちやりたかったぞ。

うっかりリョーガを手放したことが心から悔やまれた。

「ひい、ひい、しんじやう。オレもうムリ」

「あ、そこ置いといてねー。向こうでアイリスちゃんがご飯作つてくれてるわよ」

「オレ、めし、食う。頭から、ガブリ」

「そうね、トンボだもんね。好きなように食べたらいいじゃない」

あーもう無理。

今日は意地でも働かないからな。
それこそ軍隊が押し寄せてきても無視して寝るからな。
アイリスの元へ向かうと、香ばしい匂いが漂ってくる。
やっと体を休められるかと思うと全身の力が抜けてきた。

「タクミ様！ 大丈夫ですか、お顔が真っ青です！」

「アイリスよ、オレはもうダメだ。もう指一本動かしたくない」

「承知しました。お食事なら私におまかせください。どうぞこちらへ」

アイリスはそう言うと、オレの分のメシを片手にもち、地面に座り込んだ。

空いた片手で自分の足を叩いているが、膝枕って事か？

何その変態貴族っぽい食事風景。

――なぜ膝をたたんでしまうのか、理解に苦しむ。

それでは折角の足の柔らかさが台無しではないか――

うっせ！ うっせ！

出てくんな変態王！

考えるのも面倒になったオレは言葉に甘えて横になった。

色々問題あるだろうが、メチャクチャ楽だこれ。

オレは口を開けて咀嚼するだけ。

それでエネルギーの補給ができてしまう。

両手はおろか、体を起こすことすらなく食事を摂取できる、究極の自堕落。

デメリットがあるとすれば、少女にこんな事させてるという、オレの外聞がピンチってことだ。

まあそれくらいどうなってもいいがな。

「タクミ様、お食事はお終いです。満足いただけましたか？」

「うん、満足。眠い」

「ではどうぞ、ぐっぐゅっくり」

アイリスはそのまま寝させてくれた。

聖母かお前は。

遮るもののない原野に、フワリとそよ風が通り抜けた。

カサカサとなる草の音が妙に心地よい。

生えっぱなしの雑草も悪くないと思いつつ、眠りに落ちていった。

第19話 5人ではじめる独立戦争

数日経ってからリョーガが戻ってきた。
なぜかシスティアを連れて。
別に呼んで来いなんて頼んでないんだが。

「スイマセン、タクミさん、ただいま戻りました。お取り込み中の様でしたら改めます」

「只者じゃないとは思ってましたが、まさかあなた様が魔人王だったなんて！ 人間界はもう大騒ぎですよー？」

オレはというと、レイラに膝枕されながら二人を出迎えていた。
何故かアイリスと交代制になったこの膝枕だが、レイラの方はいくら居心地が悪い。

恐らくコイツの腹の中にある、打算だとか不純な部分が気になってしまふからだろう。

オレはこれ幸いと身を起こした。

「んで、首尾はどうなんだ？」

「ハイ、例の檄文ですね。『グレンシルはいただいた、ここを返して欲しいくば百億円もってこい。ー魔人王』という文面の。確実に一般人にまで広まりましたが、円なんて単位この世界でも通用するんでしゅうか？」

「そこは気にする所じゃない。魔人王がかつての領土を占拠したって事が伝わればいいんだ」

「スイマセン、理解が遅くて。そちらは問題ありません、現にこうしてここにいらつしやる訳ですし」

「それぞれ。なんでここに居んだよ？」

利用しろとは行つたが連れて来いなんて命令は出してないぞ。

システイアも平然とした顔してるし。
一体向こうで何があつたんだよ。

「ええと、あの檄文を拝読してたら心を打たれちゃってですわねー。ついつい量産して街中にペタペタと貼ってたら衛兵に捕まりかけてですわね……」

「当たり前だ、バカかよ」

「魔人王の手下扱いされちゃって、リョーガさんと一緒に逃げてたんです。そこで話を聞くうちにピンつと来るものがあつてですわねー。ひよつとしてタクミさんと私は切っても切り離せない縁で繋がってるんじゃないですか？」

「ふざけんな、そんな繋がりが一刀両断にしてやる」

「フム、おもねってもダメと……フムフム、色気の問題か？ 次はより露出の高い服で迫ればあるいは……」

前回会ったときのように、虚ろな顔をしながら左手の形を変えつつ、ブツブツ呟いている。

あるいは、じゃねーよ。

つうか商人のクセに最低限の機転も利かねえのかよ。

出来るオンナ風な見た目に騙されちゃったな。

「身一つでここまで来ちゃいました！ 養ってください。こう見えて役に立つオンナですよ？」

「はあ、わーったよ。キチンと働いてもらうからな」

「お任せください。モノの管理から夜のお相手まで何でも申し付けちゃってくださいー！」

もういい、シカトしとこう。

話半分くらいが調度良い。

ひとまず、建築に必要な資材数の計算と、その管理でもやらせておくか。

それ以外についてはおいおい考えよう。

翌日の事。

高台の方からこちらを窺う集団が現れた。

5人程度の武装した小集団で、全員騎乗している。

おそらくコモゾークあたりの偵察だろうな。

オレは手頃な石を手に取り、ヤツラの足元に投げつけてやった。

それだけで馬の足元の土が盛大に弾け、しばらくの間隊列が乱れた。

これでオレの敵意は伝わっただろう。

スゴスゴと退散していった偵察隊は、次には軍を連れてくるはずだ。

しかし、思ったより敵の動きが早かったな。

せめて家と外壁くらい建てて見せつけたかったが、まだ家一軒が建ったのみだ。

その狭い家に、オレもケツじじいも魔人少女も残念魔術師も変な商人も顔怖おじさんも、みんな揃ってザコ寝。

見栄でも実用の面でも街の再建が急がれた。

さらに翌日。

今度は300近い軍隊のお出まじだった。

殆どが歩兵だが、装備の整った正規軍だ。

舐めてかかると面倒な事になりそうだ。

オレは後ろに控えていたアイリスとドンガに声をかけた。

「二人ともよく見ておけ。今日が魔人王の復活の日だ」

「タクミ様、派手にいきましよう。他のみんなの希望になるように」

「再臨した魔人王様のお力、お手並み拝見といこうかの」

オレは頭上高くに右手を向けた。

「穿て、炎龍！」

龍をかたどった炎が天高く舞い上がっていく。

ここまでは前回と大差ない。

今度はここが違うぞ？

「弾けるー！」

オレは開いた手を握りしめつつ叫んだ。

すると龍は赤い球状に様変わりし、赤い閃光を放ちながら爆発した。

光が強いためか、みんな手を顔の前にかざしている。

爆心地点から相当離れているにも関わらず、地上に降り注いだ熱量は凄まじいものだった。

まるで突然南国に吹っ飛ばされたような錯覚を覚えるほどだ。

光が収まると、辺りは静寂が支配していた。

敵も味方すらも唾然となる稀有な状況。

今は一応戦闘中だと思うんだがな。

算を乱した敵が一人、また一人と逃げ始め、最終的には全軍が壊走した。

今のは挨拶代わりだ、次は死ぬ準備をしてから来い。

「やったあ！ ニンゲンどもを撃退できました！」

「はあ、これでもう私も人間世界に帰れないかもなー」

「レイラ、もし戻りたいなら魔王王にさらわれたと言って帰れば……」

「絶対にいやー！ あそこにだけは帰らないからね！」

そ、そうか。

あの親父には色々問題が有りそうだが、娘にここまで拒否られると可哀想に見えてくるな。

ちなみにその夜、珍しいことに女神からギフトが送られてきた。

【いつでも美女枕】っていう、念じればいつだって好みの女精霊に膝枕してもらえらるってスキルだ。

交換条件として、魔人王の力とオレのチートスキルを返せとの事。
コイツは心の機微がわからないバカなのか？
そーいやバカだったな。

第20話 不公平な住み分け

ドンガが言うには、前回の打ち上げ花火は成功だったらしい。

あれだけの芸当ができるのは魔人王くらいである、と受け止められたいらしい。

ものの数日で、若い魔人の男たちや、中年夫婦がアシユレリタへやってきた。

この調子で増えてくれれば、いずれ街としての機能も復活させられるだろう。

だが宣伝としては成功だったが、同時に人間に強い警戒心を抱かせたはずだ。

次は本腰を入れて攻めてくるだろう。

居住空間と防壁の建築を急ぐべきだった。

特に防壁は取り急ぎ必要だったが、そこでドンガの発明品が大いに役立つ事になる。

「これがご先祖様の発明品、資材用ノリじや」

「へえ、そんな役立つものがあるのね。なんて名前？」

「資材用ノリじや」

「いや、だからさ、品名を聞いてるんだけど」

「レイラ、それは資材用ノリなんだ。それ以上の事は期待するなって」
「もったいない、折角なんだから名前を付けたらいいのに……」

実際、雑な名前から想像できないくらい扱いやすく、優秀な接着剤だった。

皮膚にうっかり着いてもポロリと落ちるのに、資材同士でくっつけると、相当頑強に連結する。

形状も程よい硬度があり、塗りつける時も簡単だ。

そして防壁を積み上げていく作業は、オレが担当している。

レイラ辺りは自発的な動きに驚いたようだが、自分としてはしつくりきっている。

曖昧な記憶を振り返ると、こういった黙々作業が好きだったようだ。

部屋で一人きりになって、ひたすら組み立てる作業をしていたような。

人型の模型を作る作業の事を、何ていう娯楽だったか。

ナントカ……プラって言うんだよな。

ノリプラ……違うな。

トンプラ……惜しい気がする。

テンプラ……だったか？

うん、確かにそんな言葉があった気がする。

オレの数少ない趣味で、部屋の中がテンプラだらけにしてたっけ。

棚とかにたくさん種類飾ってさ。

「タクミ様、ずいぶんと上手に組み立てるのですね。歪みが全くありません」

「オレが生まれた国の趣味にテンプラってのがあってだな。その時の技術を活かせるようだ」

「そうだったのですか。建築作業が趣味になってしまっなんて、とても勤勉な民族なのでしょうね」

「そういう話じゃないと思うんだがな」

うまく説明ができそうにないな。

転生前の、こことは違う世界の記憶だ。

オレの部屋を見せる事ができれば話は簡単だろうが、そんな手段は知らない。

街の建設はというと、防壁はさすがに巨大建築なので簡単には終わらないが、家は少しづつ増えてきた。

1棟しかなかった家も今では4棟に増えている。

内訳はというと、1棟が最近加わった若い魔人の男たち3人。

隣の1棟がジジイと、これまた新たにやってきた中年夫婦の3人。

その向かいにある1棟がリョーガ1人。
そしてその隣にある最後の1棟が、オレ、レイラ、アイリス、シス
ティアの4人だ。

なんでだよ。

特にリョーガ、お前だけなんで一人悠々と過ごしてんだよ。

せめてシスティアはお前の所に置いとけよ。

こっちは何故か4人も集まって狭いんだっつもの。

その3人娘がまた、何かとやかましい。

特に寝る時間になると、誰がオレに添い寝するかで每晚揉める。

アホくさ。

激しい舌戦が繰り広げられる中、オレはさっさと枕片手に寝に入る。

それが日常になりつつある。

干して乾燥させた草を編み込んで作った簡易性の枕。

中には同じようにして水分を抜いた葉っぱが大量に詰まっている。

大地の匂いを味わいながら眠る事の出来る、お気に入りのお品だ。

それのおかげで快眠できるのだが、目覚めは決まって微妙な気分になつてしまう。

オレの周りに3人が付き添うようにして団子状態になっているからだ。

妙に狭いし、そもそも暑苦しい。

今は涼しいからまだ良いが、寝苦しい季節になったら最悪だろう。

防壁建設の前に、穏やかな暮らしの為に家を優先させるべきだ。

スヤスヤ眠る3人の寝顔を眺めつつ、心に誓うのだった。

第21話 暗躍する影

フワ、フワ、フワリ。

ーとうとうニンゲンにケンカ売ったんだってね。そこまで魔人に肩入れするなんて何考えてんの？

目覚ましがあの女神の声って嫌だな。

敵対したはずなのに割と頻繁に連絡を寄越してくる。

別に没交渉にした訳じゃないからいいけどさ、あー腰いてえ。

オレは寝ぼけ半分で外に出て、痛む腰を叩きながら返事を書いた。

『ほとんど成り行きだが仕方ないだろ。これはオレ自身の為でもある』

ー腰なんか押さえちゃって、昨夜はそんなにも大盛り上がりしたの？ 最初は女に興味ないフリしてたのにさ、本性出たね』

『邪推すんな、寝具がねえからだこの野郎。用が無いならオレは二度寝する』

ーまあいいわ、今日は忠告よ。今までニンゲンを簡単にあしらえてきたけど、あまり見くびらない方がいいわよ。あいつらの底力は連帯感と技術力であつて、身体能力そのものじゃないから。

『そうか。んで用事は？ まさか忠告だけじゃないんだろ？』

ーそうね。魔人王の力、アンタのスキル、リョーガのスキルを返さない。そうすればアンタたちを解放した後、下級貴族くらいのポジションは用意してあげられるわ。

まあ、それ以外要求はないだろうな。

オレを魔人王と戦わせようとしたのも、力を取り戻すためだろうし。

それはともかく、オレの気持ちはこんな感じ。

カリカリカリっと、丁寧な返答をね。

『お断りだ。街造り楽しい』

ーあつそ。後悔しない事ね。後になって泣きついてきても知らないからね！

そこで連絡は途絶えた。

突然からんで来たかと思えば一方的に消えていくよな。

超絶マイペースなヤツ。

まあ、そんな事より今日は大事な話があるんだ。

『第7回！ レイラさんの扱いが悪いぞ討論……』

そつちじゃなくて。

オレはシスティアとドンガを呼び出した。

「腰痛い。寝具欲しい。なんとかして」

「うーむ、そうすると綿花が必要になるが、農作物は軒並み燃やされてしまったしもう」

「人間の街から調達することも出来ませんが、お金は持ってます？

身一つで逃げてきた私はコイン一枚持ってないですー」

「ワシら魔人がニンゲンの金なぞ持っていようはずもない。王様は持っとるかね」

「オレは財布すらない、完全に無一文だ。レイラとリョーガもな」

「あははー、何ていうか浮浪者の集まりみたいですねー？」

信じられないことだが、これだけの人数がいて誰もお金を持っていないらしい。

冗談抜きで浮浪者集団じゃねえか。

寝具については枕と同様に、草を編んだ袋に枯葉を詰め込むことで間に合わせることにした。

以降はこの国の産業についてが話題となった。

「……という事で、人間の街から品物を手に入れようとしたら、こちらからも何か売りに出さないといけないわけです。これがいわゆる『外貨獲得』なのです」

「ふーん、あつそ。どうすんの?」

「私の見立てでは、売れそうなのは塩、動物の毛皮、薪(まき)、鉾石くらいですかねー。特に塩は運びやすいし需要はありますのでオススメですねー」

「そう。じゃあやつといて」

「待つんじゃ。今手が空いとる者がおらんぞ。今から着手するのは無理じゃ」

ここに居るみんなには、食料班、清掃班、資材班、建設班といった具合に班わけをして仕事を与えている。

どうやら売り物を作って売買をする程の余裕は無いらしい。

フカフカのベッドに出会えるのはいつの日になるんだろう。

散らばっている魔人の連中たちよ、オレの暮らしの為に早く戻ってこい!

大陸某所。

フードを目深に被っている男が、数人の護衛を引き連れて、とある建物に入っていた。

そこは鍛冶場なのか、鉄を叩く音がひっきりなしに響いている。

熱と湿気のせいなのか、空気がまとわりついてくるような気にさせる。

奥の部屋に通されたフードの男は、入室しても正体を明かさなかった。

それでも出迎えた男は慣れたもので、それを糺そうとはしない。

「これはこれは、第二王子殿か……」

「声が高い。余計な事は喋るな」

「ハッ、これは失礼を」

「去年の征伐時に製作した『機鉦兵』だが、再度依頼を頼みたい」

「……お言葉ですが、あれは確かご禁制となったはずでは?」

ーご禁制。

つまり国は禁止する方針を打ち出している訳だ。

その言葉を聞いても、フードの男は口調を変えずに続けた。

「そこは上手くやる、気にするな。悪いようにはしない」

「承知致しました。して、いかほどご所望で？」

「5機を早急に仕上げろ。期間は1ヶ月だ」

「申し訳ございません、誠心誠意努めましても、ひと月では2機が限度でございます」

「では3機だ、死ぬ気でやれ。報酬と必須素材はここに置いておく」

来客用のテーブルに置かれた2つの皮袋が、ドカリと大きな音を立てた。

その質感からは相当な量の『何か』が詰まっている事だろう。

この主人らしき男は、歪みそうになる口元を抑え込むのに必死なようだ。

眉の動きが活発になっている。

「確かに3機、承りました。必ずや期日までに」

「何かあれば使いを寄越せ。頼んだぞ」

フードの男は振り返る事なく部屋を後にした。

部屋の主人はというと、男の足音が遠ざかるのを確認してから袋に手を伸ばした。

袋の口紐をほどくと、眩く輝く金貨が行き場を求めるようにこぼれ、テーブルの上に溢れ出た。

それを見た主人は下卑た笑みを隠す事なく、作業場の部下へ矢継ぎ早に指示を出し始める。

これから始まる恐るべき計画を、アシユレリタの住民たちはまだ知らない。

第22話 出来すぎたメイド

イリヤという名の魔人の女との出会いは突然だった。
見た目はまあ、好きなやつは好きだろうな。

細身の長身で、長い髪に笑顔を貼り付けている、と評するのが適切だ。

性能はというと、マジでヤバイ。

悪い方の意味で。

あれは先日の事。

いつものように腰に大きなダメージを負ったオレは、周りで寝入っている女たちを跨いで外へ出た。

こう聞くと卑猥かもしれないが、オレが寝ているところに勝手にワラワラ集まってくるんだ。

だからオレはノット・ギルティ。

んで、外に出ると一人の赤髪の女が膝を着いてオレの事を待っているの。

いつからそこに居たのかは知らないけどさ。

恭しく頭を下げながら、こんな事を言ったんだ。

「御身の回りのお世話をさせていただきます、イリヤと申します。何なりとお申し付け下さいませ」

ほう、君は今何でもやると言ったかね。

ワシちつとばかり魂が歪んでおっつな。

今の言葉、絶対に後悔させてやるぜえー！

こうしてオレは『街の建設』と『イリヤにN0を言わせること』に勤しむこととなった。

「イリヤ、飯だ」

「はい、ただ今」

「欠片もごぼさずに食べさせろ」
「承りました」

楽々クリアだった。
まあ序の口だ。

「イリア、昼寝だ」

「はい、ただ今」

「疲れてるから、誰も通すなよ」
「承りました」

これも余裕でクリア。

マジで誰も通さなかった。

こいつはプロか？

じゃあ、次のはどうだ？

女の身で耐えられるかな、グへへへ。

この時のオレは『勝ち』を確信していた。

顔を歪めて「すみません、それはちよつと」と言われる未来まで描
けていたんだが。

「イリア、オレを抱き締めろ」

「はい、ただ今」

フワリと包み込むように優しく、そしてしっかりと抱き締められた
んだが。

この野郎、強情なヤツめ。

「そうじゃない、発情期のメス犬のようにだ」
「承りました」

え、嘘だろ。

吐息とか指先とか腰付きとかがもう絡み付いてきて、うわああー！

イヤア！ やめてください！

「なあ、なんで嫌がらないんだ？」

「あなた様へ敬愛の情以外に、何を抱けというのでしょうか」

ナシ！ ナシ！

これ系は無しっ！

どんな要求でもきつと応えるはずだ、オレの純真が汚されてしま
う。

いま『これだから童貞は』って言ったヤツは誰だ？

星を7周半するまで吹っ飛ばしてやる。

それからもイリアの快進撃は続く。

泣き言どころか不満な声ひとつ洩らさずに。

「道の小石が邪魔だ。全て退けろ」

「はい、ただ今」

「あの小高い丘が気に食わない。平たくしろ」

「はい、ただ今」

「雨が降ってきた。止めろ」

「はい、ただ今」

変わらない返事を残して、超高速で小石を片づけ、正拳突きで丘を
一撃粉碎した後に地を均し、祭壇を手早く作っては祈りを捧げて、終
いには雨を止めた。

何なんだよコイツ、一個くらいミスしろ！

齒磨き感覚で地形変えんな、雨止めんなよ！

何がおっつかねえって、その表情だ。

眉ひとつ動かささないで、数々の難題をやったのけた。

まるで紅茶でもすすってるかの様な涼しげな顔で。

そして、そんなヤツがべったり側に居る。

何故だろうか、落ち着かない。

なんとかかしてコイツを遠ざけたいが、何か良い手は無いだろうか……。

「イリア、ここに居る人数分の寝具を用意しろ」

「はい、ただ今」

「しばらくはその作業に専念しろ。その間、身の回りの事は別の者に任せる」

「承りました」

よし、大成功！

草を干す作業があるからな、すぐに終わらない仕事だぞ！

現状の不便も解決するし、一石二鳥ってヤツだ。

その後腹が減った頃に、アイリスに食事の用意を頼んだらメチャクチャ喜んでたな。

跳び跳ねるようにしてトンボを捕まえに行き、30匹くらいワツサワツサとつてきた。

満面の笑顔に泥を付けて。

あー、これだよ。

この感じがいいんだよ。

なんか一個くらいミスってるのが丁度良い。

「タクミ様、大猟です！こんなに捕れちゃいました！」

「お、やるじゃん。いい子いい子ー」

「ひうつ！ ああ………たまんねえですコレ。本当にたまんねえですよ」

笑顔つてのは、真顔やら泣き顔があつてこそだよな。

表情がコロコロ変わるコイツを見ると、確信めいたものを感じる。

「ところでアイリス、あのイリアって女は何者だ？」

「武芸百般、一所懸命。代々魔人王様のお付きの役目を任された一族の方ですよ。イリア姉様は特に優れた人物だと聞いています」

「優れてるなんてもんじゃねえぞ。ありや化け物か何かだ」

「姉様は凄いですよねえ、本当に憧れますよ」

うっとりしながらアイリスは語った。

おい、そっちに行こうとするな。

「いや、やめてくれ。お前は今のままがいい」

「本当ですか？ 本当ですか?!」

「そうだとも。だからあんなヤツを目指すんじゃない、いい子いい子」

「あうっ、わかりました。ひうっ、今までのようにお仕えます。

ああ、たまんねえですわ」

あんなのが側に二人も居たら堪ったもんじゃやない。

オレの平穩のためにも頼むよ、マジで。

第23話 泣き虫さんは だあれ？

ああー、快適！

やっぱりベッドで寝ると全然違うな。

イリアのやつ、マジで全員分をサクッと完成させやがった。てつきり敷布と枕のセットくらいだと思ってたら、ベッド一式を用意してた。

しかもフレームには龍やら狼やらの細かい意匠が施され、貴族御用達みたいな上等なもん寄りこされたぞ。

これをものの数日で、しかも大量に仕上げるなんてアホかあいつは。

ぶっ壊れキャラも大概にしろよ。

「イリア、オレはこれから防壁の建築に入る。お前はそこで足に建材を乗せつつヘッドスピンをキメて、1人で二重奏を口ずさめ」

「はい、ただ今」

「それから、飯時になったらオレを呼べ」

「承りました」

やっぱり躊躇することなくオレの指示通りに動くイリア。

美しく均整の取れた回転をしつつも建材を落とすことはなく、さらに完璧な旋律を奏でていた。

コイツにあまり活躍させない為の意味なし作業だ。

再建作業もイリアに頼めばあつという間に片付いてしまうだろう。

それをしないのはコイツだけがスポットライトを浴びるのがムカつくからだ。

この建設作業も危うく奪われそうになったしな、だから連日のように無駄な作業を振っている訳だ。

「タクミー、防衛施設についてなんだけどさー。……ええ？」

「タクミ様！ 今日のお昼についてですが……ウツフ」

「ん？ なんだよ黙り込んで。用があるんだろ？」

「え、いや、この人何してんのよ？」

「何って、仕事してんだよ」

「こんなアクロバティックな仕事風景って中々無いわよ」

「高難度の作業を苦もなくやってのける姉様、さすがです」

その間も回転数は衰える事なく、一定の速さを保ちながら回り続けている。

顔はやっぱり笑顔のままだ。

こわっ。

「アイリス、コイツってなんか弱点ないのか？」

「弱点ですか？ うーん、どうだったかなあ。急にどうされました？」

「完璧すぎてムカつく。弱みを握りたい。あとイジリたい」

「タクミさあ、もうちよつと本音を隠しなさいよ。ダダ漏れじゃない」

「そういえば、致命的に苦手なものがあったような？」

「お、それぞれ。ちよつと教え……」

「キヤアアアアーッ！」

あん？

何叫んでんだよ、二重奏はどうした？

イリアの方を向くと、完璧メイドが痙攣しながら泡を吹いて倒れていた。

辺りには足に乗せていた建材が散らばっている。

この短い時間で一体何があったっていうんだ。

「思い出しました。アカスジヘビです。ほら、この子」

「何か白いヘビが居るな」

「目の脇に赤い線が入ってるのが名前の由来ですね。おとなしくて賢い子なんですよ」

「へえー。こんなヘビいるのね。初めて見たわ」

「グレンシル近辺にしか居ない種類みたいです。先の魔人王様も愛されたとか」

アイリスに敵意が無い事がわかるのか、撫でられたりしても逃げようとしないうとしない。

確かに賢い生き物なのかもしれない。

つう事はこのへビが弱点か？

「アイリス、そいつを寄越せ。魔除けに良さそうだ」

「やめておいた方がいいと思いますよ？ このあと面倒になりそうですし」

「面倒？ どういうことだよ」

「へへへ陛下あー！ 悪魔の子が！ 悪魔の子がそこにいー！」

「グフツ 何すんだ、離せ！」

イリアが横一文字に宙を飛びながらオレにしがみ付いてきた。ガツチリとオレの首に腕を絡めて離そうとしない。

なんだこの力、尋常じゃねえぞ。

「お前ふざけんなよ、マジで離れろっつもの！」

「陛下あー、どうか御慈悲を、御慈悲をおー！」

「ああやっぱり。姉様は一度そうなたらテコでも離れませんよ」

「なんだよそれ、いつまでこのままなんだよ?!」

「落ち着くまで、ですけど。半日くらいじゃないですか？」

「……半、日？」

こうしてオレの期間限定の介護暮らしが開幕した。

ーお昼。

当然のようにオレに引っ付きながらの食事となった。

耳元でたまに涙ぐむからうっとおしくて敵わん。

オレが苛立ち半分で食事をしていると、イリアは口を広げて待ちの姿勢になっている。

「陛下、私は今両手が使えません。どうか食べさせてください」

「おう、そうか。焼き殺すぞ」

「お願いします。お腹が膨れないと復調できません」

足元見やがって、クソが！

そして何でそんなに偉そうなんだよボケ！

仕方なしにトンボを2匹つまんで口にほうりこんでやった。

「おらよ、ありがたく食べ」

「陛下、トンボの羽が胸元に落ちてしまいました。払ってください」

「ふぎっけんな。テメエでやれ」

「ダメです！ 完璧なメイドたるもの、身だしなみを整える事は初歩中の初歩です！」

「今のお前が完璧を語るな！ 生物の基礎条件も満たしてねえじゃねえかー！」

「お願いします、胸をパンパンしてください！ 斜め30度の鋭角でパンパンしてくださいー！」

「角度関係ねえだろ！ ちよつと手を離すだけで出来るだろうが！」

しばらく騒いでたら羽が取れた。

バカバカしい。

ー食後。

オレは防壁の建設作業に戻ったんだが、相変わらず首に余計なものブラ下げたまま。

もはや付属品くらいに思っていた方がストレスも少ないかもしれない。

作業を続けていると、石を手に持ったりヨーガがやってきた。

「スイマセン、お仕事中に。珍しい鉱石を見つけたんですが……お取り込み中ですか？」

「大丈夫だ。コイツの事なら巨大なアクセサリだと思え」

「リョーガ様、私のことはお気になさらず。ただの見目麗しい装飾品ですので」

「黙ってるポンコツ」

「ハイ、気になりますますが気にしません。こちらドンガさんに見てもらったんですが」

「なんだその石ころは？」

「ハイ、魔緑石というものだそうです。色々使える特別な石だとか」

見たところ、ただの緑色の小石にしか見えない。

色も均等ではなく濃淡がはっきりと分かれていた。

疎（まば）らな染まり具合から言って、装飾品やらに向いてる訳ではなさそうだが。

あとでシスティアかドンガに聞いてみるか。

「陛下、魔緑石でブローチを作りましょう」

「なんだよ、それが何か役立つのか？」

「それを使って私を口説けば、かなりの高ポイントです。女性は大概光り物に弱いのです」

「そうか。お前には炎龍をプレゼントしてやるよ」

それで弾けさせてやるよ、盛大にな。

こんな状況が夕飯後まで半日続いた、本当に勘弁してほしい。

ちなみに翌朝本人に聞いたしたら、記憶にございませんと来たもんだ。

便利な脳みそしてんなこの野郎。

第24話 年寄りの話は長い

「鋼鉄の兵士？」

ドンガがオレの作業場まで足を運びに来たから、緑色の石コロの事を聞いたんだが、返って来た言葉がそれだった。

爺さんは建材に腰をかけ、積み上がった石材に肘をかけ頬杖をついている。

あのさ、オレ王様なんだよ、その態度はなんなのかと。

無礼打ちするぞ？

「そうじゃ。忌まわしくも凶悪なニンゲンどもの兵器のひとつじゃ。他にも魔法筒なんてのもあったかの」

「それも気になるが、鋼鉄の兵ってなんだよ」

「文字通り、巨大な鋼鉄の箱のようなものが動くんじやよ。フルプレートなんてメじやない。金属の塊が動き回って暴れまわる恐るべき発明じゃ」

「じゃあここが破壊されたのも？」

「そうさのう、街を破壊したのは筒。人民を殺戮し尽くしたのは鋼鉄の兵……じやろうな」

爺さんはつぶやくように語ると、腰から皮袋を取り出した。

中身は水でも入っているのか、喉を鳴らしながら呷った。

大げさな動きで気持ちを誤魔化すかのように。

「先代が崩御されてより300余年、玉座を燃やされてもなお、市街地に立て籠もっては撃退し続けたんじや。いつか戻られる、我らの王の為にのう」

「ちよつと待て、気になってたんだ。そんな長い間ここを死守できてたのか？」

「まさしく。成人であればニンゲンなどに遅れは取らん。壁に隠れ、

野に伏せ山を駆け、散々に手こずらせたわ。だが、ヤツらは決して諦めず執拗に攻め続けた。このアシユレリタを地図から消したくて仕方が無かったようじゃ」

かつて栄耀栄華を極めた魔人の都『アシユレリタ』

今は見る影もなく、10棟程度の建物と井戸があるくらいで、開拓村と呼ぶに相応しいレベルだった。

空を見上げてみれば視界を遮るものはなく、晴天の空が一面に広がった。

悠々と滞空するトンビがヒョロロと鳴き声をあげているが、それは祝福か侮蔑なのか。

「それで魔緑石についてじやったな。自然界の魔力を秘めた石であり、鋼鉄の兵の動力源にもなっておった。天然物でも十分に力を発揮するが、天や地の加護を受けた石は比較にならない程になる」

「詳しいな。どうやってその情報を得たんが？」

「ワシが調べたからじゃよ。倒した兵の残骸からの。勇敢な魔人の勇者たちが鋼鉄の兵を5体全て殲滅したんじゃ。その命と引き換えにな。主戦力を欠いてしまったワシらは、結局ここを守りきれなかった」

「ふうん。さすが発明家だな。そんなことまで調べられるのか」

「よしてくれ。只の偏屈ジジイじゃ。もう少し腕があればたくさん命を救えたんじゃが、ワシの力量では足りんかった」

記憶の断片をつなげると、オレが魔人王を殺してしまったハズだ。

たぶん、人間や女神に唆（そそのか）されたからだろう。

きっとロクに考えもしないで突っ走ったんだらうな。

記憶の中のオレは主人公気取りというか、ガチガチの正義感を持ってそうだったし。

つまりはこの種族の苦難は、オレのせいでもある訳だ。

罪悪感が無い事も無いが、数百年も前に過ぎた事はどうしようもな

い。

「話が長くなった。ワシは研究所跡に戻るよ。若い連中を頼むぞ。廃墟が故郷では不憫で敵わん」

「なあ、ジイさん。アイリスたちは幸せだと思うか？」

「それは本人に聞いとくれ。ワシが答えることではないわ」

腰をひと撫でしてからドンガは去っていった。

背中越しにどんな表情をしているのだろう。

それを確認する気までは起きなかった。

作業もほどほどにして家に戻ると、アイリスとシステイアが待っていた。

「あ、お帰りなさいー、今日は早いですねー」

「タクミ様！今日はモリトカゲのスープにウサギ肉ですよ、スープはイリア姉様に教えてもらった逸品です！」

「おうただいま。ポンコツメイドは作業中か」

「ええと、姉様はお仕事ですね。股割りをしながら塩の精製をしてみましたけど、あれには深い意味があるんですか？」

「ない。思い付きだ」

本当に意味は無かった。

作業に大きな負荷をかけないと直ぐに終わらせちゃうから、難易度をエクストリームにしてみましただけだった。

二人はオレの帰宅を待っていてくれたらしく、アイリスは木椀にスープをよそり始めた。

立ち上る湯気に『あちち』なんて言いながら、愉快そうに。

見たところ、不幸そうには見えないな。

システイアも舌なめずりをしながら焼いた肉に塩を振りかけていた。

絶妙な加減があるのか、真剣な表情で丁寧に調節をしている。

肉くらいでこの顔をするなら、コイツは不幸と考えてないだろう。

「なあ、アイリス。お前は幸せか？」

ポツリと呟いたオレを向いて、ビタリと二人が固まる。

オタマからはスープがダダ漏れ、肉には延々塩が溢れていった。

おまえら、手！ 手元にも気をつけろよ。

「ええー、タクミさんがそんな事言うなんて何かあったんですかー？

お金積んでもそんな事言いそうにないのにー！」

「うっせ！ うっせ！ ちょっと気になったただけだっつもの！」

「タクミ様。辛い事も寂しい事もありましたけど、今は幸せです！

とつても、とつても幸せです！」

「なら良い。なんか希望があれば言え。気が向いたら叶えてやる」

オレがそう言うのと、アイリスは後手にオタマを持ったままモジモジし始めた。

システィアは興奮して握り拳を作り、塩を辺りに撒き散らした。

もう食事の準備なんかすっかり忘れてるだろ？

「あの、その、ダメだったら全然良いんですけど……。えっと、お姫様抱っことか憧れてて、その……」

「うん？ そんなもんがいいのか？ ほらよ」

「ひううーっ！ すっごいですコレ。ほんともうたまんねっす。もう一生忘れねっす」

「タクミさあーん？ 私もちよつといいですかー？ この国の交易の全権とかー」

オレがアイリスを抱き上げていると、背中からそつとシスティアが抱きついてきた。

口から強欲な要求を零しながら。

もちろん無視、つうか魔人じゃないお前に気を遣う必要ないし。
オレの腕の中で夢の世界に旅立ったアイリス、背中で粘り続けるシ
スティア。

この奇妙な光景は、レイラとイリアの帰宅まで続く事となった。

第25話 アンケートはおふざけ厳禁

ドンガに言われたからか、それとも魔人王の記憶とやらがそうさせるのか。

住民たちがこの暮らしをどう思っているのか気になり出した。そんな訳でイリアに作らせたのがアンケート用の木箱だ。

付属のアンケート用紙には予(あらかじめ)め「良いところ」「悪いところ」「何かひどいこと」の形式自由の質問3項目を設置しておいた。これである程度みんなの考えがわかればいいんだがな。

――設置後の翌朝。

箱を確認してみると、意外にも多くの回答が寄せられていた。

ざっと見て10枚近く入っていることから、一日もしないうちに半数以上のヤツらが書いてくれたみたいだ。

早速確認してみよう。

今はみんな作業に出てる時間だから、部屋には誰もいない。

申し分ないタイミングだな。

オレは『イリアが片手腕立て伏せをしながら作ったテーブル』に箱を置き、『イリアが物真似100選を披露しながら作った椅子』に腰かけた。

気づいてはいけない、アイツの異常性を自覚してはいけない。

さて、記念すべき一枚目。

ちよつとドキドキするな。

最初のアンケートは綺麗でしっかりとした文字で書かれていた。それだけで教養の高さと意思の強さが感じられるな。

――

「良いところ」

再建が始まったばかりだが、富が公平に分配されている。仕事量も

適正值のためか、不満を耳にすることがない。この調子で進めてほしいと思う。

「悪いところ」

部門によって、作業の進行スピードに差が生まれ始めている。人員の分配に問題があるかもしれない。

「何かひとつ」と

取り立ててない。引き続き頑張つてほしい。

—————

お、意外と好評価じゃん。

作業の割り振りについては相談が必要だろうな。

さて、お次はどんなもんなかな？

二枚目はなんというか、読みにくい。

独特な癖字で、書体が妙に丸く、文末にはイラストの様なものが描かれている。

なんとなく見当がついてしまったが……まあいい、読むぞ。

—————

「良いところ」

毎日のびのびと暮らせること。父親の顔を見ないで済む生活って素晴らしい！（ニコオ）

「悪いところ」

アイリスちゃんばかり構ってズルいと思う。もっと私の相手して

よ（エーン）

「何かひとつ」と

今度デートに行こうよ、景色の良い場所見つけたんだあ（キラキラ）

—————

レイラじゃねえか！

匿名で書くものに「私の相手」とか書くな。

しかも全部自分の話だし、日記かよ。

これは無効票だこの野郎。

気を取り直して次。

今度はゆつたりとした流れるような字で書かれているな。

これを寄越した人物はノンビリ屋なのか、字が上手いだけなのか。

――

「良いところ」

あなた様を見ているとムラムラします。

「悪いところ」

魂の底からムラムラします。

「何かひどこと」

今度ひと晩どうです？

――

……ゴオオオツ。

オレは指先に火を灯して怪文書を焼き払った。

最高権力者にセクハラするんじゃないよ！

達筆で書かれている分、異常性が増してんぞ。

それから中身を改めていったが、特に目立った意見は見られなかった。

毎日楽しいとか、生きるべき場所を見つけたとか、そんな内容ばかり。

そして最後の一枚。

それには細かい字で余白にびっしりと書き込まれていた。

また怪文書かと思って警戒したが、そうではないらしい。

余分な言葉を省くとこんな内容になるか。

――

「良いところ」

毎日が楽しくて、充実していて、みんな優しく、もう幸せです！

「悪いところ」

何もありません!!

「何かひどいこと」

これからもっともっと勉強して、タクミ様のお役に立てるよう頑張ります！

—————

なんとなく、手紙の向こう側に満開の笑みを見たような気がする。そっか、そんなに楽しいか。

オレは回収したアンケート用紙を手近な袋にしまい、箱を設置場所へと戻した。

外に出ると数々の作業の音や、掛け声が飛び交っていることに気付く。

確かに暗い音色じゃないなど、ボンヤリ思った。

——夕暮れ時。

帰宅したアイリスには姫抱っこ、レイラにはケツビンタで迎えた。

二人とも理解が追いついていなかったが、因果応報だ。

アンケートの内容に触れたら納得してくれたがな。

ただ一人、イリアを除いては。

少し首を捻りつつ、柔らかく抗議をしてきた。

「陛下、私には何もご沙汰が無いようですが？」

「何いってんだ。アンケートに答えたヤツだけにだって」

「ええ。既に返答済みなのですが」

「ん？ それらしきものは何も無かったが……!!」

おい、お前まさか。

あの怪文書はイリアが書いたのか?!

オレは超人メイドの腹の内に悪寒が走った。

コイツが本気で襲ってきたら、撃退することは難しいかもしれない。
い。

だが落ち着け、あれは無記名のアンケートだ。

どうか、オレの思い過ごしでありますように！

第26話 フワツと始まる、第一次アシユレリ夕戦役

フワ、フワ、フワリ。
ーとうとうニンゲンが本腰を入れてきたわよ。今回は前ほど楽に勝てないと思うけど。

女神様直々のクソ有難いモーニングコールだ。

窓からはか細くも、新しい1日の到来を告げる明かりが差し込んでいる。

どうやら早朝の時間帯のようで、他に起きているヤツは一人もいない。

オレは盛大に欠伸をしてから、オレの右手を握りしめているアイリスの手を解き、左手を掴んでいるレイラの手を振りほどき、足を枕にしているシスティアをどかし、腰にタツクルするようにしがみ付くイリアを跳ね除けた。

……跳ね除けた。

放せよイリアこの野郎。

ドアを開けると、朝焼けがキレイだった。

あの女神には時間の概念が無いのかよ、寝かせろっつの。

オレは道の端っこまでタラタラ歩き、いつものように返事を書いた。

『本腰つて事は、ここに攻めてくんの?』

ーそう。アンタも聴いたことあんでしょ。機鋳兵つていうらしいけど、それが攻めてくんの。こいつはさすがに手強いわよ。

そうですか、ご忠告どうも。

まさかここで話は終わらないよな。

きつとこの後何らかの提案があるんだろう。

朝食の焼きへびを賭けてもいい。

ロー力を返してよ。そうしたらニンゲン達に便宜を凶ってあげるから。アシュレリタは放棄せざるを得ないだろうけど、殺さないようには出来ると思う。

『この前のアンケートの中身見てなかったのかよ。あれ読んだ後に受けられる提案じゃない』

ローアンケートって……アンタがそんな面倒くさいことを?! 嘘でしょ？

コイツは何故知らないんだ？

書かれた回答の詳細を知らない事は有りえても、アンケートを取っていた事自体を知らないのはおかしい。

ひよつとして、屋内の様子は見る事ができないとか？

万能のようで力の行使に制約が多いのかもしれない。

考えてみれば、オレは女神についてほとんどの事を知らない。

今どこに居るのかという基本的な情報でさえ。

まずは相手を知ろう。

受けるかどうかはさておき、今後有利な条件での交渉も可能となるだろう。

『お前は今どこに居るんだ。父さんだけにでもコツソリ教えなさい』

ローだから誰なんだよ。ちよくちよく家族ネタ放るなよ。ふざけるなら話はお終いだからね。

シレッと居場所を聞き出そうとしたが失敗だ。

アホの子のクセに、こういう時にはノリが悪い。

それからアプローチを試してみたが返事は無かった。

協調性の無い奴め。

それから昼まで何事もなく過ぎていったが、太陽が中天を過ぎた頃に報せは届いた。

「陛下。敵影を確認しました。鋼鉄の兵3体、騎兵10、歩兵300程です」

「わかった。みんなを呼んでこい」

「はい、ただ今」

いつもの表情で報告してきたイリアだが、少しだけ影が差していたようにも感じた。

やはり機鋌兵には思うところがあるんだろう。

笑顔で感情を隠している分凄みが滲（にじ）み出ていた気がする。

ほどなくして、家の前に全員が集められた。

やはりここは指導者らしく演説とかすべきだろうな。

ーコホン。

「えー、ニンゲンどもが攻めてきた。だから迎撃する。ドーンとやって。パパッと散らすぞ。以上」

よし完璧。

微妙に士気が上がったところで、戦えそうな面子だけ引き連れて防壁の裏手まで移動した。

ちなみにこの防壁は人の頭くらいの高さまで積みあがっており、街を半周だけ囲んだところまで建設は終わっていた。

完了しているのは北・東・南の方向であり、今回の敵は東の小高い丘から攻めてくるようだ。

西の方は海があるだけなので、海軍がやって来なければ守る必要は無い。

その東側を見ると確かに物々しい一団が見えた。

2〜3人分の高さのある鉄の塊が見えるが、あれが機鋌兵か。

人型で2足歩行だなんてロマンがあるじゃないか。

テンプラ好きの男の子の夢が詰まっているな。

「さあさあ、ニンゲンども。この地に攻め入った事を後悔しなさい！

四天王筆頭、魔導將軍レイラ様が相手になるわよ！」

「何言ってるんだアイツ？」

「四天王って……他の三人は誰なんでしょうか？」

防壁の上で仁王立ちになったレイラが吠えた。

この距離じゃ敵に聞こえてないだろうに。

「レイラ様、矢面に立たれては危険です。どうぞこちらへ」

「あ、スイマセン」

おいしっかりしろ、四天王筆頭。

はしやいで叱られた子供みたいじゃねえか。

戦意を下げるような真似は慎めって。

遠くに陣取る敵方からも、なぜか爆笑の声が聞こえてきた。

なんとも気の抜ける戦場だな。

これから殺し合いをする自覚はあるのか？

オレはさつきから気になっていることをリョーガに問いかけた。

「リョーガ、ふと気になったんだが」

「ハイ、なんででしょうか？」

「これから戦闘だったのに、なんでレイラは短いスカートを着てるんだ？」

「スイマセン、私は見ません。変な目で見たりしませんから！」

リョーガ君、オレの意図する答えから大分遠い回答だったぞ。

「レイラには戦闘意欲が無いから」とか、単純に「見られる事が好きな目立ちたがり屋だから」とか、そんな意見が聞きたかつたのに。

オレが余計な事言っただけに、リョーガの顔の向きが不自然な方向を向いてしまった。

西側に敵は居ないんだって東なんだって。

魔人側も人間側もフワツとした空気の中で衝突したのだった。

第27話 失言は死を誘う

私は最前列を機銃兵に守らせながら、魔人どもの動向を見定めていた。

連中から仕掛ける気は無いらしく、壁の近くに10人にも満たない数の敵が立っているだけだ。

偵察者の報せでは20人程度しか居ないと聞いているが、油断はできない。

あの壁の向こうに敵兵が伏せられている事も有りうるのだ。

「ハツハツハ！ なんだよありやあ。ボロ家にチビた壁、兵は居らずジジイと女子供が前線に居るぜ！」

「何が魔人王だ、浮浪者の集まりじゃねえか！」

兵士どもから笑い声が聞こえた。

恐怖に駆られても困るが、悔るのもよくない。

気を引き締め直さないと。

「全軍、三列縦隊だ！ 機銃兵を先頭にして進み、魔人どもを駆逐せよ！」

可能な限り厳しい声を出したのだが、あまり効果が見られない。

動きは重く、隊列も正規兵とは思えない程緩い。

凄惨な噂話と、眼前の光景のギャップに気が抜けてしまったのかもしれない。

それでも3体もの機銃兵が居るのだ。

負ける心配をするだけ無駄だと、自分に言い聞かせた。

—————

敵は三隊に分かれて攻めてくるようだ。

例の鉄塊の後ろに歩兵が続いている。

あれだけの巨体のくせに意外と動けるようで、駆け足くらいの早さが出ていた。

よほどの重量なんだろうか、地震のような地響きが止まらない。確かに脅威的な強さと言えそうだ。

敵の構えは右左翼と中央による一斉攻撃か。

根拠は特に無いが、相手の指揮官は初心者だなと感じた。

大した駆け引きもせずに全軍突撃なんてバカのやる事だ。

仮に勝ちを確信していたとしても、だ。

「イリアとレイラは右のデカブツをやれ。」

「わかったわ。まずあのでっかいのを倒すのね？」

「機鋤兵さえやれば戦意もなくなる。手早く片付けろ。イリアが攪乱、レイラが魔法で攻撃だ」

「はい、ただ今」

気合い十分のようで意気揚々と駆け出す二人。

オレはその背中を見送りながら考えていた。

なんで二人ともスカートをはいてるんだろう、と。

「真ん中はリョーガが行け。オレは左に当たる」

「スイマセン！ わ、私は怖くて……恐ろしくて……！」

あ、そうだ。

コイツは人見知りと言うかシャイボーイと言うか、気が弱いんだつた。

今も青ざめて縮こまったヒグマの様にしている。

なんとか奮起させなくては使い物にならない。

「お前はいいのか？ あいつらにあんな暴言を吐かせたままで」

「スイマセン。笑い声は聞こえたんですが、内容までは……」

聞こえてないのはオレも一緒だったの。

でもここは作り話でもして、ピクニック感覚で攻めてきた敵兵をリヨーガに蹴散らしてもらおう。

「あいつら『あんなおっかねえ顔してるヤツ初めて見た』とか言っ
笑ってたぞ」

「……は？」

いいぞいいぞ、食いついてきた。

リヨーガはキレル前に左のこめかみをクイツと上げる癖がある。
今はピクついてる程度だからもうひと押しだな。

「あの顔で壁に隠れる臆病者とも……」

「顔は関係ないでしょうがーっ！ 許さん！」

放たれた矢のように飛び出したリヨーガはあっという間にレイラ
たちを追い抜き、大きく跳躍した。

いや、跳躍というより滑空に近いな。

一体どれ程のスピードが出ているんだか。

そして落下の加速を利用した重い右が機銃兵に炸裂。

一瞬で鉄塊は地中に沈み、そして巨大な地割れを引き起こし、中央
の歩兵もそれに巻き込まれた。

「人の顔を笑う愚かさを噛み締めながら死ぬが良い！」

「コイツは何を言ってるんだ?！」

「ば、化け物だあー！」

「まだ言うか貴様らあー!!」

縦横無尽。

一騎当千。

そんな言葉が安っぽく聞こえるほどの暴れっぷりだな。
さすがは【三指の力】を持った怪物。

魔人王たるオレですら寒気を感じる程だ。

一体目を沈めた瞬間に戦の勝敗は決まったようなものだった。

勝ち戦と踏んでいた士気の低い兵に、未熟な指揮官に戦線を支える
気概など無かった。

まともなぶつかり合いをする前に撤退し、その背中をリョーガの拳
で散々に討たれた。

さすがに憐れに感じたが、これは歴とした独立戦争だ。

相手が諦める日まで『ヒグマの怪物』には頑張ってもらおうか。

第28話 男性読者必見のお風呂回だよ！※挿絵
ナシ

なんとという失態！

なんとという恥さらし！

禁忌の機鋌兵まで持ち出してこの有り様か！

敵方の桁外れの強さと、味方の不甲斐なさには驚くばかりだ。

あの勇壮だった兵たちはもはや見る影もない。

目は虚ろで口はだらしなく開き、槍を支えにしながら歩いている。

さながら流浪の軍ではないか。

一体だけ残った機鋌兵も左腕がなく、まっすぐ歩くことすら困難
だった。

時折進路を修正しないと道から外れてしまうほどに。

押して押されての接戦の果てであればまだ良かった。

勝敗は兵家の常と言い、戦ってみるまでどちらが勝つかはわからない
ものだ。

だが今回は、ぶつかり合いの前の敗走だ。

もはや言い訳のしようもない。

――せめて各隊で連携が取れれば。

いや、それも無駄だろう。

あの真つ赤な顔をしたヒグマのような怪物。

あやつが居る限りは何度挑んでも結果は同じのはずだ。

――こうなれば、奥の手を使うしかない。

私は心を鬼にした。

例え誰に罵られようと、悪鬼の如く呼ばれようと構わない。

必ずや魔人どもを根絶やしにしてやる。

せいぜい首を洗って待っている。

――

うーん、体が痒い。
水浴びはしているが、あちこち痒い。
もう少し丁寧にケアしないとマズイんだろうか。

「どうしたの？ そんなにボリボリ掻いちやって」

「いや、なんか首がかゆくて」

「そっか、じゃあキレイにしないとね」

「そうだな」

お湯にでもゆっくり浸かりたいけど、そんな設備はもちろん無い。
そんなもん完備してるのは都の金持ち連中くらいだ。
オレたち貧民は川で洗うのが普通だ。

「ねえ、少し遠いんだけど……東の方には温泉があるの！ ちょっと
行ってみない？」

「行かないの」

「そう言うと思ったわ。興味ないの？」

「めんどくさいの」

レイラは聞く前からわかってたと言いつつも、大袈裟にうなだれた。

早くその絶望を友としなさい。

でもひよつとして、アイツならやれるかも。

オレは期待半分の気持ちでイリアを見た。

「広場に風呂を作れ」

「はい、ただ今」

「ゆったり入れるヤツな。足伸ばして寛ぎたい」
「承りました」

え、できんの？

言ってみるもんだな。

コイツはやると言ったらやる女だ。

期待して待つことにしよう。

それからその日の建設の作業を始めた。

天気が良いからか、体中にそこそこの汗をかく。

程良く疲れた頃にイリアはやってきた。

「陛下、ご所望のものが完成いたしました」

「もうできたのか?!」

朝頼んで午後に来るっておかしいだろ。

突貫工事でももう少しかかるだろうが。

まあ、その辺はイリアだし……普通か。

早速風呂に向かうと、物珍しさからか皆集まっていた。

特に女性の喜び様がすごい。

身綺麗にすることはストレス発散になるんだろうか。

「陛下、中を改めなさいますか?」

「じゃあちよつとだけ」

「畏まりました。どうぞこちらへ」

入り口は木造で木の薫りが味わえる。

少し入り組んだ通路を歩くと脱衣所になっており、外から覗かれる心配もない。

脱衣所を出ると、木の板の囲いのなかに岩石が歪な四角形をかたどっており、そこには湯が張られていた。

所々花や苗木も植わっており、目を楽しませる配慮もされている。クソツ、癪だが完璧な仕事だ。

非の打ち所がない。

「ところで、男湯と女湯はどう分けるんだ？」

「なぜ分ける必要があるのでしょうか？」

質問を質問で返された。

まあいいか、時間帯で振り分ければいい。

早めが男、遅めが女とか。

日替わりで順番変えるとか、やりようはいくらでもある。

「陛下、まずは御身から愉しまれてみては」

「そっか、悪いが一番風呂をもらうか」

他の皆には出て行ってもらって、オレは脱衣所で服を脱ぎ始めた。

うん、皆には出て行ってもらって。

……オウ出ていけよ。

当然の権利のように四人娘は居残っている。

さらに迷いなく全員が脱ぎ始めた。

アホかお前ら。

「何やってんだ、出ていけよ！」

「一番風呂なんてズルい、私だつて入りたいもん」

「タクミ様が湯浴み中に倒れたらと思うと心配で心配で！」

「いやあー、裸の付き合いが仲を深めるって言うのでしょうか？ これを期に親睦を深めようかなあーって」

「私は陛下の専属メイドです、片時も離れる訳にはいきません、フフ」

イリア笑うなおつかない。

ほぼ力づくで追い出して、オレはゆっくり風呂に入った。

やっぱり湯はいいな、体の芯から休まるし。

ちなみにオレがのんびりと入浴している間のこと。

結局あの4人はオレがあがるのを待たずに入ってきた。
それから色々あったが、オレは無事に風呂から出る事ができた。

全く、こんな時くらい一人にして欲しいもんだ。

第29話 あだ名を付けよう

防壁がとうとう西側まで完成した。

これで町をグルリと囲んだ事になり、最低限の防備は用意できたと言える。

低くて薄い壁だが、無いよりはマシだろう。

万感の思いで完成品をアイリスと一緒に眺めていた。

「これだけの作業をお一人でできてしまうなんて、タクミ様すごいですー！」

「そうかそうか、オレはすごいかね」

「はい！ 歴代の王さまの中でも一番すごいです！」

「はっはっは、もつと褒めてくれて構わんぞ？」

「素敵！ 最高！ 一生付いていきます！」

オレはアイリスを抱き上げ壁の上に立ち、そこで駒のようにクルクルと回った。

キヤアキヤアとアイリスは騒ぐが、満面の笑顔で楽しそうだ。

やっぱり大仕事を終えたからなのか、オレもテンションがおかしい。

ひとしきりはしゃいだ後、オレたちは町を見渡した。

20人足らずだった人口も順調に増え、今では50人に迫るほどだ。

それに伴って家屋も随時建設して、町の規模も大きくなっている。

最初は東側の壁にひつつくように数軒しか建っていなかったが、今は東端から西端まで届くほどに広がった。

住居以外にも交易品の為の作業小屋、大浴場、昨日は食堂まで建てられた。

ガレキの山だった頃を思い出せなくなる程の復興を果たしている。こうして町並みを眺めていると、自堕落なオレでさえやる気が湧い

てくるから不思議だった。

それからアイリスを抱えたまま壁を降りると、いつの間にかイリアがただずんでいた。

何も言わずにじつとオレたちの事を観察してたのだろうか。

怖い。

「陛下、お食事の準備が整いました。どうぞこちらへ」

「わかった。それで、いつから見ってたんだ？」

「本日は旬の山菜炒めに、オオトンボの甘辛焼きでございます」

「おい、答えろよ」

無視かこの野郎。

制裁の意味を込めて小石を側頭部目掛けて投げつけてやった。

するとイリアは避ける動作をする所か、歩幅の調節だけでかわしやがった。

お前はマジで規格外だな。

食堂にたどり着くと、すでに何人かは昼食を食べていた。

オレたちを呼ぶ声があったので向かってみると、レイラとシステイアが向かい合うようにして座り、一席間を空けてリヨーガが座っていた。

「タクミたちもこれからご飯でしょ？一緒に食べようよ」

「食堂ができたというから来てみました、立派ですねえー。ここも大浴場も魔緑石で燃料を賄っているというんですから、とんでもない石ですよね」

説明どうも。

魔緑石は膨大な魔力エネルギーを秘めた天然の鉱石だ。

そのエネルギーを変換することで、熱を生み出すことができる。

日に日に力を失っていくが、魔力を再度込めることで半永久的に使

い続けることが可能である。

まさに夢のような燃料なのだ。

「ねえタクミ。そろそろ決めたほうがいいんじゃない?」

「あん? 何の話だよ」

「そりゃあ四天王よ! 人も増えてきたことだし、良い頃合いじゃない」

コイツまだそんな事言ってるのか。

肩書き大好きかよ。

「異名付きで呼ばれるなんてかつこいいじゃない。私はやっぱり魔導
将軍がいいなあ」

「なんだよそれ。お前はパンモロ将軍だ」

「笑い声でつかい将軍とかはどうですかーあ?」

「これ以上タクミ様に近寄らないでください将軍」

「違う! そういうのじゃない!」

結局レイラは魔導将軍を自称する事に。

誰も呼ばないと思うがな。

それからは異名の名付け合いになった。

リョーガはクマ将軍、システィアはメガキンカ大臣とあだ名なのか
陰口なのかわからない名称が飛び交った。

「イリアさんはどうしようかしらね?」

その名前を出すなんて、レイラは天然なんだな。

こんな人間兵器に凄みを与えるような真似すんな。

「私なら、完璧なメイドってつけるかな」

「危険物。それ以外あるか?」

「みんなの憧れってどうです？ 私なんかそうですし」
「それでは、皆様のご意見を集約致します」

そうして生まれてしまったのがこちら。

『みんなも憧れる、完璧に危険なメイド』が爆誕。

何が集約だ、意味合いが変わってんじゃねえか！

だがこれにツツコミをいれるのは癪だ。

チラチラとオレを見るイリアを無視して、オレは昼食を食べ続けた。

第30話 触れてはいけないもの

「アイン將軍、よくもおめおめと戻られましたな」

「全くですな、領地に逃げ帰るかと思いましたが。それとも第二王子という立場に甘えるおつもりか？」

謁見の間に哄笑が響き渡る。

半ば罪人のような扱いを受けながら、王や側近共の前に引き立てられた。

非難されてしかるべき戦果だが、この者らに責める資格などない。

まともに槍を握ることすらできない連中に、

戦った者たちを嗤（わら）う権利があるだろうか。

「アインよ。そなたは禁制とされている機鋳兵（きこうへい）を内密に率い、あろうことか大敗し、いたずらに兵を死なせた。相違あるか？」

「違いありません」

「何か申し開きがあれば申せ」

「魔人どもの強さは正（まさ）しく脅威。語り継がれた伝説など霞むほどにごさいます。何卒『真機兵（しんきへい）』の使用許可をいただきます……」

「なっ！ 気は確かか！」

私を嘲（あざけ）る周囲の声も非難の色を帯びはじめた。

青ざめるもの、身を震わせるもの、反応は様々だが考えている事は同じだろう。

『この世界を破滅させるつもりか』と。

「私は至って冷静です。機鋳兵ですら太刀打ちできない化物どもを相手に、手段を選んでなどいられません」

「ならぬ、あれに触れてはならぬのだ！ 『神鋳石（しんこうせき）』を

再び世に放つことは許されぬ！」

「上手くやってみせますよ、私ならね。このままでは人間に未来はありません。魔人どもに滅ぼされるのを待つか、危険を犯しつつ敵を駆逐するかを選ばねばなりません」

「和解を、和睦（わぼく）の道があるではないか！」

「和睦ですか。やはり父は老いたのですね」

私が合図するなり謁見の間を手下の兵が大挙して押し寄せた。

警備の兵など相手にならない、選りすぐりの精兵だ。

一歩一歩踏みしめるように父のに歩みより、玉座から引きずり降ろした。

「アイン將軍、狂われたか！」

「謀反（むほん）だ！ アイン王子の謀反だぞ！」

「だまれ。口先だけで戦ができるか！」

「何ですと?！」

「父上、居室で休まれるが良い。全てが終わった頃に王権は返上いたしましょう」

「……愚かな。育て方を誤ったか」

「衛兵、父上をお連れしろ」

観念したのか、抵抗もなく連れられていった。

そして真新しい王として私が着座する。

人間の頂点として君臨することは、格別に気分が良い。

——他の者共はどうしてやろうか？

ねめつけるように一同に目線を送ると、重臣だった者たちは例外なく震え始めた。

先刻の威勢はどこへいったのやら。

極力感情を押し殺して言葉を放った。

「貴様らは謹慎している。沙汰（さた）は追って通達する」

「アイン將軍、このような事は神がお許しになるはずが……」
「將軍ではない。王、だ」

私が指で自分の首を叩くと、配下の兵がその男の首を斬り落とした。

これで良い、王とは強くなくてはならない。
他を圧倒する絶対者であるべきなのだ。

「軍を再編する。王都ミレイアの兵はすべて私の指揮下とする！ 眞
機兵の準備も急げ！」

私の命令で皆が一斉に動き出した。

邪魔者たちも縛られて移送されていく。

私を侮（あなど）っていた者たちを一人残らず片付けられた。
権力とはなんと甘美な味がするのだろうか。

さあ、魔人王よ。

貴様が偉そうに見下ろす世界はどんな色をしている？

その醜く尊大な眼で、今何を映している？

ふんぞり返っていられるのも今のうちだ。

地を這いずる苦痛を思い知らせてやる。

—————
—————

「よし、これでルートは完成したな」

「タクミ様、もう少し溝を浅くしてみては？」

「フッフッフ、アイリス君。この程度のものであれば何ら障害にもならんのだよ」

「失礼しました、不勉強でした！」

「陛下、目標値点にエサを配置しました」

「よろしい。ではアイリス君、イリア君、成り行きを見守ろうか」

アシユレリタ郊外にある空き地で、三人揃って屈みながら足元を眺めていた。

これから始まる観察に皆が胸を踊らせている事だろう。

巣から出てきたアリスさんが早くも何かに気づいたようだ。

小さな頭がエサの方に向けられ、チマチマ進みだした。

だが目の前には大きな溝が！

彼は避けるのか、それとも越えるのか。

さあどうする？ 一体どうする!?

越えたあー！

急な傾斜をもともせず突き進んだー！

さすがアリスさん、強い、賢い、かわいい！

「……なにやってんの？ 揃いも揃って地面を凝視して」

「何って、アリスさん見てんだよ。お前も入るか？」

「遠慮しとく。あとタクミ、ドンガさんが呼んでたわ」

「わかった、日暮れになってから向かう」

「早く行くわよ、ホラ」

は、離せえ！

オレの至福の時間の邪魔するなあー！

ああああー……。

こうしてオレはドンガの研究室へ拉致（らち）されていった。

初めてここで会った時に、ジジイがガレキに埋もれてた場所だ。

そこは地下室だからか、中は意外と損傷がなかったらしい。

少し整備をした後に研究を開始していた。

その研究室で数々の凶面に埋もれながら、ドンガはオレを待ち受けていた。

「おお、ご足労すまんな。ちと相談したいことがあってのう」
「手短にな。オレは観察があつて忙しい」
「そうかそうか、では早速。用件というのはこれじゃ」

そう言つてパンパンに膨らんだ麻袋から大量の石を取りだし、机の上を広げた。

灰色のこ汚い石にしか見えない。
なぜ呼び出してまでこれを見せたのか。

「これはの、使いきつてしまつた魔緑石(まりよくせき)じゃ。捨てるのか、魔力を封じて再利用するか決めてくれ」

「あー、そういうや考えてなかつたな。もうこんなに使つたのか？」
「風呂がな、相当の熱を使うんじゃよ。食堂の方は誤差レベルの力しか使つとらん」

「そつか。風呂は譲れん。石を探すのは面倒だから再利用しよう」
「力の再封入が出来るのは、飛び抜けて魔力の強いものだけじゃ。お前さんとリヨーガの小僧くらいじゃろう」

「マジかよ。レイラやイリアはどうだ？」
「あの嬢ちゃんたちでは足りんのう。それと言つておくが、イリアの魔力量はワシらと大差ないぞ」

そうなのか。
イリアは規格外の存在だと思つていたが、常にそうとは限らないらしい。

それにしてもこの量の石に対処すんのかよ。
めんどくせえなあ。
よし、リヨーガさん頑張つてくださいね！

「なあ、こんなに早く力が無くなるなんて不便だぞ。もっと強力な石は無いのか？」

「無くはない。だが、ワシらはそれを持つとらんし、自然発生もせん」
「なんだそれ。誰かが作ったもの……だつたりするか？」
「ご明察。愚かしい人間が生み出したものじゃ。精製するのに世界の力をねじ曲げるといふ、馬鹿げた発明じゃよ。詳細はワシも知らんが」

世界をねじ曲げるほどのもの、ねえ。

人間の探求心の業の深さよ。

ドンガにとってどんな因縁があるのか、目に見えて機嫌が悪くなつた。

「六体目の鋼鉄兵……」

「ん？ 何か言つたか？」

「いや、独り言じゃ。忘れてくれ」

ドンガは誤魔化すように、大きな音を立てながら石を袋にしまい始めた。

その俯（うつむ）いた顔に宿る感情を読み解くことは出来そうになかった。

第31話 お気に入りのお枕

あらゆる物事が私の思い通りに動いた。

政務官も、兵士も、国民どもに至るまで皆が平伏するのだ。

この世で自在にならないものは何一つないとすら思える。

……魔人ども以外は。

あの者たちさえ居なくなれば、世界に逆らう存在は居なくなる。

私を偉大な王と崇める者で溢れかえるだろう。

一刻も早く、不遜（ふそん）で忌々しい悪魔どもを打ち果たさねば。

それが絶対者の義務である。

目的を果たすには『真機兵（しんきへい）』の存在が不可欠であり、それを動かすには『神鉱石（しんこうせき）』が必要となる。

神鉱石を生み出すには、大地の持つ膨大な魔力をかき集めて蓄積しなくてはならない。

一朝一夕にできる物では無いと知りつつも、待ちわびている私には我慢が難しかった。

「例の物はまだなのか？」

「申し訳ありません。大地の力が弱まっているせいか、思うように集約できておりません」

「急がせろ。不足分は兵士どもの魔力を充てるのだ。死人がいくら出ても構わん」

「ハッ！ そのように通達致します」

前回の神鉱石の作成時には、いくつかの災厄が国を襲った。

地割れが起き、作物は大凶作となり、いくつかの川が枯れたようだ。

年寄りどもは「神の怒りに触れた」と騒いでいたが、何とも馬鹿げている。

『神』の存在を信じている者は老いぼれくらいだろう。

偶然に偶然が重なっただけであり、神鉱石と天災の因果関係は証明されていない。

科学だ、科学こそが全てなのだ。

この世界の物事は全て数式で成り立っている。

目に映らないものを崇める神秘主義など、時代錯誤(じだいさくご)も大概にするべきだ。

窓の外に目線を移すと、沈みゆく太陽が見えた。

この方角におぞましい魔人どもの巢がある。

きっとあの者どもも、同じ空を見ている事だろう。

それもいずれ見納めになる。

魔人王よ、枕を高くして寝られるのも今のうちだ。

せいぜい余生を楽しんでおく事だ。

眠い。

さつきお風呂に入って、ご飯もいっぱい食べた。

だから今すっごい眠い。

寝たい。

でもこいつらのせいで、散々騒ぐせいで寝られない。

何をモメているのかって？

そりゃこれのせいだよ。

『第1回 誰の膝枕が至高か！ この際ハッキリさせよう選手権』だ。

クソが漏れる程どうでもいい。

つうか外でやれよ、家の中で騒ぐなっつもの。

きっかけは些細(ささい)な話だったと思う。

だれの足がキレイだの、肌が白いだのそんな話題が持ち上がったた気がする。

それが盛り上がり過ぎたんだろう、このザマだ。

寝入ろうとするオレを無理やり現実世界に押しとどめ、足の品評会

を開く事を強制するアホ4人。

そもそも一番を決めて誰が得するんだって話だが。

ー足を愛でる際には体毛の流れに逆らわない事が重要だ。

『ムダ毛の処理をしていたらわからないじゃないか』

そんな反論が聞こえる事もしばしばだが、それは見識が浅すぎる。

貴方の両目はなんの為にあるのか。

毛穴の向きを知る事で、本来存在していた毛の向きを知るなど造作も無い事なのだ。

目を皿のように見開き、狂おしいほど愛する足を目に焼き付け
……。

るっせえぞオイ!

マジで性癖の話しか出てこねえな?

魔王王の記憶とやらを消しちまうぞ。

ベッドに座るオレの前に4人が一列に並び、ご自慢の生足をオレに見せつけている。

オレは本当に眠いんだけど、配慮してくんないの?

「私はね、伊達に普段から足出してないわよ? 見られる事で意識的

にケアしようと思う訳、だから私が一番よ」

これはレイラの言。

そっすか、どうでもいいです。

「タクミ様は私の膝がお気に入りなんです。すごいリラックスしてましたもん。だから私の膝枕が一番です!」

今のはアイリス。

そうだったかもしれないし、そうじゃなかったかもしれない。

つうか覚えて無い。

「私の足って毛が薄いんですよねえ、処理もいらなくらい。だから

無駄にカミソリも当てないんで肌を傷つけないですよー？　なの
で私が一番ですー」

あーそうですか。

キレイだと思いますよ、すごいすごいシステイアすごいっすー。
だからもう終わりにしてください。

「差し出がましいようですが、私の足が一番なのは間違いありません。
なので陛下、ちよつとこれから発散しに行きませんか？」

何を発散すんだよこの野郎。

シレッと意味深発言するんじゃねえよ。

つうか足の自慢をどこやった？

「タクミ、もちろん私が一番でしょ？　そうでしょ？」

「お願いします、私を選んでください！　あと頭なでてください！」

「システイアです、システイアに清き一票をおねがいますー」

「陛下、裏手に丁度良い茂みがあります」

「うるっせー！　オレは眠いんだよ！」

結局それから騒ぎが落ち着く事はなかった。

眠いなら幸いと、代わる代わる4種の膝枕を受ける事になってし
まった。

眠りたい人間にとってこれは苦痛でしかない。

意識が無くなりかける頃に次の膝に移らされるのだ。

人の頭をボールみたいにポンポン回しやがって。

オレの安眠を、平穏な夜を返せ。

心の声がこいつらに届く事は決して無かった。

第32話 明け方のメッセージ

とうとう町の人口が1000人超えたぞー！

おめでどう、オレたち！

ジジイ1人しか居なかった廃墟がよくぞここまで再生出来たものだ。

その日の夜はちよつとだけお祝いムードだった。

特に魔人からすると嬉しくて仕方がないんだろう。

故郷を破壊されて以来、迫害も受ける日々だったもんな、無理もないか。

「何か欲しいものはありますか？」とその時に聞かれたよ。

ここまで導いてくれたオレに恩返しだつてさ。

だからオレは即答したね。

ー豪邸、と。

今住んでる家はかなり手狭だ。

1人で住むには十分なんだが、何故か5人暮らしなのだ。

さらに言えばベッドも狭苦しい。

そこそこ寝相の悪い4人が毎晩乗り込んでくるので、家主のオレが一番辛い思いを強いられていた。

だから広い家を希望した。

ついでにでかいベッドも。

「すぐに出来たら嬉しいなあ」なんて言ってしまったせいだろうか。

ほんとにすぐ建つたよ、半日足らずで。

完成した家は町の中心付近にあり、広さも3軒分ほどある。

内見しようと思って中に入ると、新築特有の匂いがした。

木の香り好き、最高。

中にはイリアが直立でオレを待っていて、目が合うなり深々と頭を下げた。

その頭をポンポンと叩き、頑張りを労ってやった……つもりだ。うん、内装もシンプルながら機能美が備わっているな。実を言うと、派手な装飾つてのはあまり好きじゃない。特に生活空間の中にあるものは。見ていて疲れるし、うつとおしくなる。だからこの家はオレ好みと言える、でかしたぞ。

オレは早速荷物を運び入れた。

国王とは思えないほど運送量が少なく、往復する必要なく完了した。

さて、新しい家の中で、新品のベッドに埋もれる感覚はどんなもんかな？

憧れの「大」の字になって眠れたりするんだろうか。楽しみだ、マジで。

——翌朝。

オレは「よく伸びたツクシ」のような形で目が覚めた。

クソツ　なんでだ?!

前よりずっと広いベッドなのに……。

周りを見てみると、その理由がはつきりした。

ベッドの右上付近にはアイリスが寝ていて「く」の字になっている。

まあ、これくらいはいいだろう。

体が小さいからそこまで邪魔になってないし。

問題は逆側か。

左上はレイラで「つ」の字だった。

本当におまえは寝相悪いな!

場所取りすぎだぞ、オイ。

左下はシスティアで「し」の字だ。

両手を挙げたまま体が反った状態になっている。

割と辛い姿勢なのか、苦悶の表情を浮かべている。

だったら早く起きろつて。

右下はイリアなんだが「よ」の字だった。

これは形容表現ではなく、かなり正確な「よ」をかたどっている。お前は寝てても完璧なのかよ。

本来の美しい寝姿からはほど遠いが、脱帽ものだぞ。

改めて全体を見るとなんとたるカオス。

このど真ん中でオレは寝てたのか。

そりゃツクシのような形にもなるわな。

喉が乾いたから井戸へと向かった。

東の空は赤みが差していて、「今日」が始まることを報せていた。

オレの一日は、これよりずっと後に始まるんだがな。

薄く雲がかかった朝焼けを眺めていると、空からフワリ、フワリと光のツブが舞い降りてきた。

随分と久しぶりの連絡だが、なぜだろう。

今までは感じなかった胸騒ぎがする。

いつもと同じように胸元で光って消えるんだが、焦れているオレには妙に遅く感じられた。

ー助けて、タクミ。言えた義理じゃないけど……このままじゃ消えちゃうよ。

なんだ、このメッセージは。

『助けて』はまだ良いにしても『消える』ってどういう事だよ？

『おい、何があったんだ。説明しろ』

ー人間がまた私の力を奪い始めた。今までの比較にならないくらい、凄いやつだよ。どうか、止めて。これ以上石を、止めて。

『石ってなんだよ。もう少し詳しく話せって』

それ以来返事はなかった。

いつもの無視とは違う、これは緊急事態なのだろう。

ひとまずはドンガカリヨーガに相談しよう。

何らかの情報が手に入るかもしれない。

この時のオレはまだ気づかない。

人間の持つ底力を、技術力とその脅威（きょうい）を。
ヤツらを見くびっていたつもりは無いが、対策は何一つ講じてい
なかった。

油断していたと言うしかない。

「東の丘に敵影！ 鋼鉄の兵です！」

この報告を切っ掛けに始まった戦いは、かつて無いほどの死闘とな
るのであった。

第33話

6体目

東の丘に人間の軍が展開している。

300かそこらの歩兵と疎(まば)らな騎兵と、ここまでは前回と大差ない陣容だ。

大きく違うのは、ゆつくりと一体だけで近寄ってくるコイツだろう。

機鋳兵。

今までの個体よりも一回りくらい小さいだろうか。

より人型に近づいたようなフォームのためか、動きも比較的滑らかだ。

どたらかと言うとゴツゴツしているタイプの方が強そうに見える。それなのに何故だろう、さつきから冷や汗が止まらない。

非戦闘員はオレの家に避難させたが、遠くへ離脱させる必要があるかもしれない。

「あれは……六体目の鋼鉄の兵！　とうとうコイツが動きおったか！」

「なんだよドンガ、知ってんのか？」

「前回のガラクタなど比較にならん兵器じゃぞ。ここは全力で戦って……いや、逃げるべきじゃ！」

「逃げるったって、アシユレリタを放棄なんかできねえよ！」

「バカモン、命と建物どっちが大事じゃ！」

「タクミ、敵が立ち止まったわ」

ちようどこちらと敵方の中間点で機鋳兵は立ち止まった。

すると足を肩幅分にかけて腰を落とし、両手を組んで前に突きだした。

その手に魔力が集まり始める。

「もう間に合わん！　攻撃を防ぐんじゃ！」

「みんな、手を貸して！ マジックシールド！」

レイラが魔法防御を全面に展開した。

薄く白がかった壁のようなものが眼前に現れた。

「急いで、私一人じゃ破られちゃう！」

「力を貸せったってどうすりゃいいんだよ？」

「魔法を放つ要領で魔力を手に集めて、魔力壁に向かって両手を突きだして！ 早く！」

ここは魔法の専門家の言う通りにしよう。

みんな要領を得ない表情のまま、言葉通りに両手を前に出した。

それに反応したのか、壁の色味が白さを増した。

どうやら成功した、らしい。

「来るわよ、みんな気を付けて！」

悲痛な叫びを聞き終わる前に光の波動がオレたちを襲った。

圧倒的な衝撃と圧迫感に体がのけ反りそうになる。

いつ終わるとも知らない衝撃を一心不乱に捌（さば）き続けた。

一秒が随分と長く感じる。

まだか、まだ途切れないのか。

膝を屈しそうになる心を押し止めつつ、ひたすら魔力を送り込ん
だ。

どれだけの時間が過ぎたかわからないが、攻撃が止まった。

目の前には平然と機鋌兵が立っている。

あれだけの力を放つても何ら問題がないらしい。

「みんなは！ 町は？」

「ハイ、大丈夫です。遠くがメチャクチャですけど」

リヨーガの指摘の通り、町そのものは難を逃れていた。

みんなが隠れてる家も無事だ。

そのかわり、町の郊外は酷いものだった。

草原も、木々も、丘陵も何もかもが消滅していた。

焼けて露出した地表と、不自然に出来た溝があるのみ。

こんな攻撃が直撃でもしたら、オレでも耐えられるかどうか……。

「第二波が来るわ！ みんな備えて！」

「なんじゃと?! 余りにも早すぎる！」

「こんの野郎……調子にのるんじゃねえ！」

オレは最前列に飛び出して機銃兵を狙った。

これ以上好き勝手させるわけにはいかない。

いきなりフルパワーで決めさせてもらう。

「穿（うが）て、炎龍！」

これまでとは違い、三匹の龍が絡み合ったかのような炎が駆けていった。

猛然と突き進む炎は避ける暇さえ与えようとしない。

直撃だ。

そう思ったのも束の間、機銃兵からは光の波動が発せられていた。

真っ正面からぶつかり合う光と炎。

眩しく輝きながら周囲に衝撃を巻き起こした。

吹き荒れた風に家がきしみ、街路樹が大きくしなる。

みんなも飛ばされそうになるが、身を屈めることで耐えていた。

――敵はどうなった？

目を細めながら確認する。

やはりそいつは立っていた。

微動だにせず、同じ場所で、無傷のまま。

まさか、オレの炎龍が効かないだなんて……。
シヨックを隠せないが、そんな事は後回しだ。
敵がまた攻撃を放つモーシヨンに入ったからだ。

「鋼鉄の兵よ、いったい何があつたというのじゃ?! あの時よりも遙かに強力になっておるではないか!」

「ジジイ、泣き言は後だ。リョーガ、接近戦を仕掛けるから付いてこい。レイラたちは町の防衛だ、流れ弾にやられないよう気を付けろ」
「ダメ、あんな化け物相手に無茶よ!」

「遠距離戦の方が不利なんだ、こつちから打って出るしかないんだ。いくぞ!」

「ハイ、おつかないですが……頑張ります!」

リョーガと二人並んで飛び出したが、なんだか体の動きが鈍い。

オレだけかとも思ったが、リョーガも似たようなものらしく、驚いたような顔をしている。

この短い戦いの中に大きく体力が削られてしまったらしい。

まだ相手の実力の底すら見えてないというのに。

「オレは右から攻める、お前は左側から行け!」

「ハイ、わかりましたーっ!」

戦略も勝つ見込みもない、単純な挟み撃ちだ。

それにどれだけの効果があるかは分からない。

それでも今は、少しでも勝率を上げる努力をするしかなかった。

第34話 惨敗の果てに

敵前で左右に展開したオレたちは、攻撃や牽制を受ける事は無かった。

標的を絞りきれないのか。

はたまた余裕の表れなのかはわからない。

それでも攻撃をするしかなかった。

機鋳兵を挟んでリョーガが反対側から跳躍している。

巨体にかかる重力を活かして一撃を放つつもりらしい。

オレは反対側で腰だめの状態に入る。

攻撃のタイミングを合わせて、可能な限り威力を押し上げなくては。

リョーガの丸太のような右手が機鋳兵の胴体に消えていく。

敵の体が吹き飛ぶ前に、迎え撃つように正拳突きをお見舞いした。

ドゴオン！

胴の中は空洞なのか、奥深くで反響したような音が聞こえた。

まるでぐもった鐘が鳴らされたようだった。

他の機鋳兵と同じように、中に人が居るのかもしれない。

「タクミさん、効いてません！ 早く離脱をしないと……」

「馬鹿野郎！ よそ見するな！」

「うわあっ！」

視線をひと時外した隙を狙われてしまった。

機鋳兵の右腕がリョーガの脇腹に深々と突き刺さり、1000キロは優に超える巨体を町の方へと吹き飛ばした。

力なく転がり続けた後に、防壁に激突してようやく止まったようだ。

倒れたりリョーガにレイラたちが駆け寄っている。

今はあいつらに任せる事にしよう。

1対1だ。

こうなったら真つ向勝負で勝つしかない。

機銃兵はオレの方へ向き直り、正面から相對する。

そして、先に仕掛けたのは向こうだった。

オレの顔を狙って右の拳が飛んでくる。

顔を沈めてかわすが、それを狙って左の膝があびせられる。

オレは瞬時に体を浮かせて、膝を両手で弾くと反動で吹き飛ばされた。

体にヒットしていないからダメージは特にない。

こいつの動きは早く、そして重い。

反応や動きが素人臭いが、それを補って余りある破壊力がある。

油断していると致命打を食らってしまいかねない。

こつちの攻撃は効かない。

相手の攻撃はもらったからお終い。

ここまで不利な条件も滅多にないだろう。

再度機銃兵から仕掛けてきた。

目で追うのがやつとの速さで間合いを詰められ、沈み込むように体を低くしている。

そこから突き上げるように降り上げられた左の拳。

オレはそれを回り込んで避け、鉄の足に蹴りを入れた。

重い音が聞こえるばかりで損傷を与えた気配は無い。

これも効果はなしか。

丸腰ではやはり分が悪い。

炎龍でカタをつけるべきだろう。

この技はノータイムで発動はできない、どんなに急いでも数秒は必要だ。

攻撃の隙について放つしかないだろう。

今度は手数で勝負に出るようだ。

左右の腕を小刻みに突き出して一撃を当てようとしてくる。

狙いが見え見えだから避けることは難しくない。

足さばきだけで対応できた。

顔の左右を鉄塊が高速で通り過ぎ、体に空気の振動が伝わる。その度に肌に粟がたつ。

腰の入っていないとはいえ、一発でも食らえば危険だろう。

反撃の機会を間違えないようにしなくては。

焦れた敵が大きな動きに出た。

右腕を高々にかかげ、大ぶりの姿勢に入っている。

それを待っていた。

横殴りの右に対して体を沈めて避ける。

相手の無防備な脇腹を視界におさめつつ、両手に魔力を込め始めた。

――よし、これで十分溜まった。

技を放とうとした瞬間、敵の狙いによく気付いた。

腕の振りによる反動を利用して機鋹兵の体が回転する。

その勢いのままオレに向けられたのは裏拳だ。

――避ける……ダメだ、間に合わない！

中途半端に回避行動したのが却って悪かった。

顔の下半分に拳を受けてオレは吹っ飛んだ。

3回転ほど地面を転がってようやく止まれたが、アゴに食らってしまつたようだ。

脳が揺らされたせいで視界が歪み、まともに立つことができない。

今襲われたら危険だ、間違いなく殺されてしまう。

勝ちを確信したのか、機鋹兵は一步一步時間をかけて歩み寄ってくる。

その体を青白く発光させて。

本当に光っているのか、それともそう見えてしまっただけなのかは分からない。

そしてオレの数歩前で立ち止まった。

何かをするでもなく、文字通り立ち尽くしている。

一体どうしたんだ？

今が絶好のチャンスだろうに。

様子を窺（うかが）っているると機鋳兵は体の向きを変えて、東の方へ歩いていった。

もしかして自陣に戻るつもりなんだろうか。

相手の意図はわからないが、どうやら助かったようだ。

まだクラクラする頭を軽く小突きながら、オレも町へと戻っていった。

機鋳兵の活躍に応えるように大歓声を上げる敵軍。

それとは正反対に悲痛な声ばかり聞こえる自軍。

戦いの趨勢（すうせい）は誰の目にも明らかだった。

ーしばらくして。

オレは負傷者と一緒になって体を休めている。

隣にリョーガが寝ているが命に別条はないらしい。

ただ骨にヒビでも入ったのか、身じろぎする度に小さく呻き声をあげている。

次の戦いに連れていくことは難しいだろう。

オレ自身はというとダメージそのものは浅いが、心への衝撃は大きかった。

手も足も出ない相手が現れて、戸惑いを隠せない。

今は命が助かったが次は無いだろう。

何か対策を見出さないと殺されてしまう事には変わりは無かった。

アイディアが浮かばずに、悶々としているオレの元にドンガがやってきた。

「大丈夫か、派手にやられたようじゃが」

「まあ、平気といえれば平気だ。なんでヤツは帰って行っただけ？」

「詳しいことまではわからないが……稼働時間があるのかもしれない。表面が青白く光っておったろう？ あれは魔緑石がオーバーヒートを起こして過剰な熱を持った時に見られる現象じゃが、それが問題だった可能性がある」

「稼働時間……か。行動できる時間が限られている？」

「おそらくな。確信があるわけではないぞ？　かつてここを襲ったときもそうじゃった」

「そうだよ、何か知ってるんだろ？　『6体目の』なんて言うくらいだ」

オレが責めるような声色で問うと、ドンガは少しだけ遠い目をした。

何か悪い記憶を引っ張り出しているんだろうか。

「いつか話したのう。5体の鋼鉄の兵を倒すことはできた、だが精兵を失った我らは敗北したと」

「あれだろ。防壁を建ててた時に話してたよな？　覚えてるぞ」

「正確に言うと、5体目を倒した時点ではいくらか余力を残しておつたんじゃ。主力級のものどもは浅くない傷を負いながらも戦意は十分じゃった」

「そして戦ったのか？　その6体目とやらと」

「その通りじゃ。突然現れたその鋼鉄の兵は、瞬く間に主力部隊を壊滅させたんじゃ。吹き飛ばし、踏み潰し、あの光の波動で焼き尽くした。残された家屋を粉碎していったのもそうじゃ」

ドンガの視線は足元に向いていた。

両手はギチリと音を立てて握り締められている。

よほど辛い出来事なのだろう、聞いているこつちが罪悪感を覚えるほどの。

「それだけの戦力を知ってて何で黙ってた？」

「騙(だま)すつもりはなかったが、不適切じゃったな。すまんかった。ニンゲンたちは数えきれんほど何度も攻めてきたが、アレを見かけたのは一度切りじゃ。それも先ほどと同じように、あの時も直ぐに戦場から離脱した。ひよっとして、壊れてもう動かなくなったのかと期待をしていたんじゃが」

「当てが外れたな。しかも強化されてるそうじゃないか」

「全くじゃ。根拠の無い期待はするものではないな」

頭を掻(か)きながらドンガは少しはにかんだ。

場を重くしていた空気もいくらか軽くなる。

その和やかさを引き締めるように、オレは問いかけた。

「ドンガ、知ってる範囲内で教えろ。あの化け物の構造とか原理とか、とにかく知っていること全てだ」

「構造まではわからんが、原理は知っておる。あの鋼鉄の中に魔緑石があるはずじゃ。今回の特別製の石じゃろうが、構造までは変わらんじゃろう」

「魔緑石を動力にして、魔力か熱のエネルギーを使っていると考えていいか？」

「おそらく魔力じゃろう。熱に変換しているにしては胴体が熱くなっておらん。そもそも効率が悪い上に、鋼鉄でさえ融解する程の温度になってしまうわ」

「魔力、伝達……か。もしそうならこんな作戦はどうだ？」

「聞かせてもらおうかの、どういったものじゃ？」

「説明の前に準備が要る。簡単な実験も試したい。お前の研究室から例の石を持ってきてくれ」

「ふむ、何を考えているかはわからんが。とりあえず用意はしよう」

もし全てが予想通りの結果となれば、この作戦は上手くいくはずだ。

というよりも、他にもう手段はない。

まずは実験が上手くいってくれること。

今はそれを祈るばかりだった。

第35話 夜が明けて

なんとという強さ。

あらゆる武力が霞むほどの圧倒的な力。

尊大で邪悪な魔人どもが、まるで子供扱いだ。

私は凄まじい兵器を生み出してしまったのだろうか。

グレンシル地方を我が物顔で占拠していたあの男。

情けない姿で住処へと逃げていった魔人の王。

彼奴の命も間も無く吹き消える事となる。

私自らの手によつて、魔人の歴史は地上から消失するのだ。

それにしても、強大な存在というのはなんとも心地よい。

地上を這いずるものを見下ろす優越感は、どこまでも甘美である。

無駄に抗う姿を見る事は愉悦そのものであり。

その者達を踏み潰す快楽は何物にも代え難かった。

『機鋳兵』をものともしない化け物相手でも、この『真機兵』の足元にも及ばなかった。

『魔緑石』を遥かに上回る魔力を封入した『神鋳石』による莫大な力のおかげだ。

この神鋳石は自然に生成される魔緑石とは違い、大地のエネルギーを集約して生み出されたものである。

これは飽くなき研究の成果であった。

人間の科学こそが至高である事を証明できたのだ。

連続で起動すると指揮系統がエラーを起こしてしまう問題はあるが、あれだけの時間が動けるなら十分だった。

次こそは奴らの命に手が届くだろう。

真機兵から降りて陣幕で休んでいると、手下が報告の為にやってき

た。

こんな大戦の折でも国内の事情というのは変化するものである。疲れた足をほぐしながら報せを聴いた。

「陛下、報告致します。先のエレナリオでの土砂災害に続き、サウスアルフでも大規模な地割れが発生した模様。付近住民は混乱を来（きた）しています」

「田舎町か、捨て置き。あつても無くても構わん辺境の地だ」

「王都ミレイアでは抵抗貴族がデモ活動を扇動しております。『頻発する災害は真機兵のせいだ、神の怒りに触れたのだ』と口々に喧伝（けんでん）されております」

「首謀者を全員捕えよ。沙汰（さた）は帰還後に直ちに執り行う」

当然、皆殺しにするつもりだ。

当主はもちろん女子供、老人に至るまで、一族全てを殺し尽くす。

あらゆる権力を握り、そして今世界最強の力を手にした私に逆らったのだ。

もはや『神』と名乗ることさえ許されるであろう、絶対者たる私に。これから愚民どもに『教育』を施すべきであろう。

私に齒向かう事の愚かさを。

――翌朝。

私は真機兵に乗り込み出撃した。

兵どもは大歓声をあげており、天が裂けんばかりに響き渡っている。

そこでしつかり目に焼き付けておくがいい。

今日、魔人の歴史が幕を閉じる。

迎え撃つ敵の布陣は昨日と大差ない。

入り口を数十人が塞ぎ、2人がかりで突撃を仕掛けてくる。

メイドのような女が1人、それと魔王。
昨日のイノシシのような男は死んだのか？
たったひと撫（な）でで落命するとは、ひ弱な生物というのは哀れ
だな。

それから私は最後の戦いを仕掛けた。

『史上最も偉大な王』として君臨する未来を思い描きながら。

オレはイリアとともに出撃した。

リョーガも参加したが、傷付いた体であの攻撃を捌ききるこ
とは難しいだろう。

歩兵への睨（にら）みを効かせる為にも、町に残ってもらった。

「いいか、イリア。お前が倒す必要はない。出来る限り引きつけてく
れ」

「承知致しました」

「時間さえ稼いでくれればいい。後はオレが何とかする」

「陛下、ご命令であれば死も恐れませんが、ですが相手はリョーガ様を
ものともしない怪物にございます」

「女のお前を死地に連れて行くことは抵抗があるが、他に任せられる
ヤツが居ないんだ」

「子細理解しております。ですので奮起の為にも、褒賞（ほうしょう）
をたまわりたく」

つまりは『何かくれ』って事だ。

こいつ、状況分かってんのかよ。

全滅するかどうかって瀬戸際なんだぞ？

それでも褒美をやるだけで頑張って貰えるなら、今は良いのかもし

れない。

あれだけの力を目の当たりにして、心が挫（くじ）けるほうがよっぽど悪い。

「わかったよ、作戦成功したら何でも望みを言えって」

「承知致しました……フフ」

今の返し怖い。

最初の返事と変わらないトーンなのに寒気がしたぞ。

『何でも』ってのは流石に言いすぎたか。

後で撤回してもいいかな？

「鋼鉄の兵！ 前方より1体が接近中！」

「さて呼び出しだ、行くぞ」

「ハイ、ただ今。……ウフフフ」

いつもより柔和さを増したメイドを引き連れて、鉄の化け物の元へ向かった。

待ち構えるのは鉄塊の巨兵だ。

表情なんてわからないが、きつと上機嫌なんだろう。

だが快進撃もここまです。

その軽率さを後悔させてやる。

オレは腰の麻袋に触れ、『手品のタネ』に指を這わせたのだった。

第36話 唯一の手段

オレたちの構えは単純だった。

イリアが陽動して、生まれた隙をオレが叩く。

今残された戦力ではこれが限界だった。

手負いのリョーガは出せないし、レイラは町の防衛に不可欠だからだ。

イリアはやはりただ者ではなかった。

武芸百般との噂が高いが、偽りはないらしい。

柳のようにしなやかに動き、避ける仕草は風を泳ぐ綿毛のようだ。間合いを見切っているのか回避行動も最小限に収めている。

イリアは避けている間も小刻みに短剣で斬りつけるのだが、目立った効果は無いようだ。

せめてもう少しまともな武器を持たせてやりたかった。

その隙にオレは装甲の薄い関節部分に攻撃を見舞う。

可動部分は多少の隙間が開いている。

鋼鉄を砕く手段がない以上、防御の弱そうな所を攻めるしかない。

気紛れのようにオレにも攻撃が飛んでくるので、気を抜いたら一撃もらってしまいそうだ。

集中しなくては。

攻撃の手を休めて跳躍し、一度距離をとった。

機鋳兵に変化は見られない。

何度もオレの鉄拳を受け、イリアの短剣による斬撃を食らっているのだ。

こどもも平然とされると自信を失いそうになる。

「陛下、作戦に滞りはありませんか？」

「大丈夫だ。イリアこそどうだ？」

「脅威的な力と速さですが、それだけです。回避を重視している限りは問題ありません」

「わかった。こっちはまだ時間かかりそうだ。そう少し粘ってくれ」

オレの言葉を聞き終わるなり、イリアは特攻していった。

伸ばされる鉄の腕を駆けながらかわし、腕関節に一刀を浴びせてから離脱した。

キンツと乾いた音が響いただけで、ダメージは無いようだ。

その間にオレは機鋳兵の背中を襲った。

時間をかける程こちらが不利になるかもしれない。

作戦の為に速攻を選ぶことにした。

左右の腕、両足の関節を狙いもつけずに乱打。

もちろん損傷を与えるどころか、揺るがせる事すらできない。

怒りに任せて渾身の右もくれてやったが、結果は同じだった。

『化け物』なんて言葉も生易しい。

そんな陳腐な言い方で表せる存在ではなかった。

絶望に膝を折りそうになるが、それには耐えた。

オレがすっかりしなくては何も始まらない。

「陛下、敵の動きが」

「あれは不味い！ 止めさせるぞ！」

「ハイ、ただ今！」

機鋳兵は突然アシユレリタに片手を挙げた。

その手には魔力が集約され始めている。

今あの攻撃をさせるわけにはいかなかった。

レイラと手負いのリョーガに防げるはずがない。

「全力で行くぞ！ 真上から腕に叩き込め！」

「承知しました！」

二人の全体重を乗せた攻撃が機鋳兵の左腕に向けられた。手首に狙いを定めて。

オレは両手を組んで叩きつけ、イリアも左手を柄の底に手を添えて降り下ろした。

さすがの巨体も耐えきれなかったのか、腕が大きく下がる。光の波動は地面に向けられ、大きな溝を作っただけだった。だが、それは誘いだった。

すぐさま逆の手で払われ、オレたちは吹き飛ばされてしまう。受け身を取れたオレとは違い、イリアは地面に引きずられるようにして転がった。

オレよりも遥かにダメージが大きかったらしい。

「イリア、大丈夫か！ 今助けてやる！」

「陛下、申し訳ありません。私の事は気になさらずお逃げください」「うるせえ！ ふん縛ってでも連れていくからな！」

オレの行動を見透かしたように、機鋳兵が魔法攻撃の姿勢に入っ

た。
オレとイリアをまとめて吹き飛ばす気だろう。

オレは見よう見真似で魔法防壁を張った。

頼りなく、そして歪（いびつ）な壁。

これがオレたちの最後の生命線だった。

イリアも震える手を伸ばして魔力を送ってくれるが、果たしてこれで凌げるのか。

機鋳兵の腕には十分な程の力が集まりかけている。間もなく無情に放たれるだろう。

どうやらオレの作戦は失敗に終わったようだ。

「陛下。短い間でしたが、お仕えできて幸せでした。魂だけになってもお側に居ります」

「あと一步、いや半歩だな。魔人のやつらに平穏な暮らしを与えてやりたかった……」

暴力的な光が集約を終えた。

眩い光の波動がオレたちの元へ。

向かうことなく、光は暴走して鋼鉄の両腕を吹き飛ばした。

腕は肩の部分からダラリと下がり、両足は碎けたように崩れ、バランスを保てなくなり、巨大な鉄の塊は地に伏した。

「これは、いったい……?」

「そうか、ようやくか。やっとオレの『毒』が効いたようだな!」

「陛下、毒とは何を指しているのでしょうか?」

「そうか、お前にはまだ細かく話してなかったな。これだよ」

オレは腰の袋から取り出した。

魔力が空になった使用済みの魔緑石だ。

「攻撃の最中にコイツを大量に放り込んだ。関節部分に重点的にな」

第37話 増長の果てに

無敵と思われた鋼鉄の兵士にだって、ものの造りを知れば付け入る隙がある。

こちらの仕掛けが働くのが遅すぎて焦ったけど、ギリギリで間に合ったようだな。

今も仰向けになって横たわる巨体は動くこともできずに、破損した両手からも煙が上がっている。

「空の魔緑石は元の状態にもどろうとして魔力を吸うようになる。それを活用してみた」

「素人である私の見識ですが、そのような使用法は初めて目にしました」

「こいつは魔力を籠めれば再利用できる。つまり強い魔力が側にあれば吸収する代物ってことだ」

「では突然倒れたのも」

「動力となってる石の力を吸い付くしたか、四肢に命令を出す指揮系統を寸断したか、どっちかかな」

ガコン、と物音がした。

まるでドアでも開いたように、胴体部分が開放された。

そこも魔力で制御していたんだらうか。

開かれたきり動きはなかった。

警戒しつつ中を覗くと、若い男が椅子に腰かけていた。

目に怒りと困惑の色を宿した人間。

危うく皆殺しにされかけた、この騒動の張本人。

睨み付けるオレの目に力が籠る。

イリアの方からもギリツと音が上がった。

「こんな事が有り得るはずがない！ 私は最強の力を手に入れたんだ！」

「知るかよ、負けた方が弱いんだろうが。調子にのってタラタラ戦ったお前の作戦ミスだよ」

「こんな結末認められるか、下郎め！ この世で最も優れ、崇高なる存在に向かって無礼であろうが！」

随分と滑らかに動く口だな。

こいつは言葉だけでケリをつけようとするタイプか？

居るんだよな、口先だけ動かして体を動かさないヤツってさ。

身を危険に晒すことなく戦場で暴れまわるような人間なんて、所詮はこの程度の人間性なんだろうな。

「こいつさえ動けば貴様らなんぞ！ 動け、なぜ動かん！ 魔力は十分に残っているだろうが！」

半狂乱になって男が足元の大きな石を叩き始める。

叩いて直そうとするのは万国共通だったりするのかな？

その石が動力源なのか、魔緑石とは比較にならない程巨大だった。手のひらサイズの魔緑石とは違って人間の胴体くらいの大きさがある。

もしかして、女神が言ってた『力を吸った石』とはこれの事か？

何はともあれ、幕引きだ。

これ以上コントに付き合う義理もない。

「もう気は済んだよな？ じゃあ死ね」

「何だと?! 私は王だ、相応の待遇で迎えろ！」

「あ、そうなんだ。王様なんだねすごい。じゃあ殺しまーす」

「ま、待て……」

「穿て、炎龍！」

こんな幼くて向こう見ずな王が居るわけ無いだろ。
せいぜい武将が良い所だ。

仮に王だったとしても、こんな危険思想を持ったヤツを生かしておけるか。

怒れる龍が内部を燃やし尽くし、巨大な魔緑石をも破壊した。

パリンつとガラスが割れる音がし、残されていた魔力が解放され、光の筋が天に昇っていった。

その光に連れられるようにして、炎龍も並走していく。
そして空高くまで昇ると盛大に弾けた。

地上には熱線と轟音が降り注ぎ、防御の姿勢を余儀なくされた。
結果的に被害は無かったんだが、さすがに冷や汗が流れたぞ。
向こう見ずな行動は慎まんといかんね。

「タクミ、大丈夫?!」

「お怪我は、お体はご無事ですか!」

レイラとアイリスが駆け寄ってきた。

オレの腹にダイビングしながら。

疲れてんだからやめろ!

オレたち、勝ったんだよなあ。

こうしていると実感が沸いてくる。

気が抜けて腰を着いて倒れてしまう。

勢いに任せて仰向けになり、空を下から眺めた。

うーん、雲ひとつ無い晴天であるな。

「敵が逃げていくけど、どうするの?」

「ほっとけ、アイツらには何もできん。それに疲れた」

青空を眺めながら答えた。

女神は無事だろうか。

消えてしまうと行っていたが、どうなったんだろう。

「お前の力はこの通り返したからな。」

だから早くお礼の一つも寄越せよな。

だがここまで考えてふと気づく。

「ーあれ、女神への力の返し方って、これで合ってたのか？」

なんか爆発してたし、もしかしてマズイ事した？

喜び手を取り合うみんなとは対照的に、オレの笑顔は固くひきつってしまっていた。

最終話 転生を断ったら、女神がチートスキルをくれた

あの大战から数日が過ぎた。

それまでの騒ぎが嘘のようにアシユレリタは日常を取り戻していた。

オレはというと町から離れた高原までやって来ている。

イリアから逃げるためだ。

「陛下は約束なさいました。どんな望みでも叶えると」

かつてない圧迫感とともに迫ってきた阿呆メイド。

言質をとつてる為か相当強気の姿勢だった。

もちろん褒美くらいはやるが、何でもって訳にはいかない。

コイツの考える『どんな望み』の範囲がどこまで入っているのか。考えるだけでも身の毛がよだってしまう。

「陛下の をいただけですか。もちろん から に

ん」
してください。ですが や でも私は構いませ

悪い予感的中した。

こいつは規格外のアホでもあると思ひ知る。

そしてこんな事を口走りながら迫るイリアは、オレにとって恐怖の対象そのものだった。

だから逃げた。

アカスジヘビの『ミーくん』を置いて。

今頃大変な騒ぎになっているだろうがオレは知らん。

残った奴らでなんとかしてくれ。

草原で1人寝転がってみる。

あの日見上げた空とはまた違い、長く延びた薄雲が散らばっていた。

それが一層空の青さを引き立てているようでもある。

涼しげな風も吹いて土や草の匂いを運んでいく。

サラサラと優しい音を立てながら。

生き残ったんだなあと改めて思う。

いつ死んでもおかしくない戦いだった。

命があるからこそ、こうしてゆとりを愉しめる。

時間の感覚も、他人の目も、この世に縛り付けるものが無いからだろうか。

ふと魂が世界と繋がったような錯覚を感じる。

多くのものから解き放たれたような、不思議な気分だ。

いや、そんな小難しい話は置いておこう。

今はただ、この涼しさを味わえばいい。

フワリ、フワリ。

オレは思わず身を起こした。

久しぶりの女神からのメッセージだった。

これがやってくるといふ事は無事なんだろうか。

逸（はや）る気持ちを抑えて受け取った。

——本当にとんでもないヤツよね。【4指の力】を持つ化物とは言え、神鉱石の兵器に勝つちやうなんてさ。

オレは慌てて木の棒を掴むと、地面に返事を書き起こした。

『頑張ったらなんか勝ってた。つうかお前は大丈夫なのか？ 力は

戻ったか?』

ーああ、神鉱石を壊してくれたんだよね。ありがとう。でもあの終わり方は予想外だったよ。暴発のせいで力はほとんど戻ってこなかった。

『やっぱあれじゃダメだったか。解放すればなんとかなると思ってた』

ーおかげで私の力は「一指の力」分くらいしか残ってないわ。3指分を取り戻すのにどれだけ時間がかかる事やら。

『いやほんとスマン。何か手伝うか?』

ーいや、いいわ。どうせ時間をかけるしかないんだし。気遣いありがとね。

やっぱりのやり方じゃ問題があったのか。

返し方を確認しとくべきだった。

でもどうやら本人が消失する事態は避けられたみたいだから、最悪の結果は回避できたのか。

そう、前向きに捉える事にした。

ーもうさ、アンタの好きに生きていいよ。力は返してほしいけど、今となつては全力でも敵わないしね。自然死するまで待つてるから。

『微妙に怖い言い方だが、わかった。死んでまでこの力を貰おうなんて思わん。そのときキツチり返す』

ーそうして頂戴。そもそも魔人王を倒す為に呼んだんだし。大暴れせずに大人しくしてくるなら目を瞑（つぶ）っとくわ。

そういえばオレはそんな理由で転生したんだよな。

魔人王になってからはすっかり忘れてたぞ。

旅に出た当初はクソスキルを寄越されたりしてたっけ。

『なあ、なんかスキルないのか? 良いのあったらくれよ』

——急に言わないでよね。今は……こんなんしかないよ。

フワリフワリと贈られたスキルはこれだった。

・叡智の王（えいちのおう）

基礎的な統治知識を呼び出せる。さらに領民から信頼と共感を
得やすくなる。

『これ、いいじゃないか。今必要なものだぞ』

——そんなんでいいの？ それだと今より弱くなるよ。

『これからは武力なんかいらねえよ。それに魔人王の力があるし、
リヨーガも居るしな』

——私としてはスキル差分の力が戻ってきて嬉しいけどさ。反対
する理由なんかないよ。

『早速スキルを入れ替えてくれ、オレはやり方をしらん』

——ちよつと待ってて。今差し替えるから。

その言葉を聞くなり、体が少しだけ重くなった気がする。

ひよつとしたら力が弱まったせいかもしれない。

それでも『叡智の王』の方が欲しいから問題無いな。

『こんな愉快的な毎日を送れるのも、転生させてくれたからだな。あり
がとう』

——え、アンタ……今お礼を言った？ 嘘でしょ？

『ケンカ売ってんのかよ。感謝してるのはマジだつて』

——いや、前に『感謝させてやる』とかは言ったけどさ。改まって
言われるとむず痒いね。

『そういうもんかもな。そのうち暇な時にでも遊びに来いよ。なん
だったらお礼も兼ねて町に別荘も用意するぞ』

——はあ、アンタには勝てないな。そのうち行くかも。それじゃあ
ね。

『おう、またな』

オレはそれからもしばらく空を眺めてただずんでいた。
どこに居るかわからない女神を見つめるように。

――数日後。

オレは例のメンバーで自宅で飯を食っていた。

怪我の治ってないヤツも居るから食堂まで出向くのは控えているからだ。

いつものようにトンボを食っていると、外が何やら騒がしくなってきた。

見張りの兵と揉めているようだった。

『だから通しなさいよ、私は呼ばれて来たんだってば』

『確認を取って来ますからここでお待ち下さい、勝手に入ろうとしな
いでくださいって！』

『そんな二度手間する必要ないよ。アンタたちの親玉に会わせてく
れりや解決するんだから』

『この人話聞いてくれない?! リョーガ様、助けてください！ 妙に
馴れ馴れしい侵入者が！』

『誰が馴れ馴れしいだこの野郎！』

『怒るポイントも何かおかしい！』

ああ、この声は……。

来るなり揉め事起こすってどうよ。

アイツらしいっちゃらしい気がするが。

「なんだか、外が騒がしいわね。誰なのかしら？」

「タクミ様。どうかされましたか？ 嬉しそうな顔をして」

「いやさ、馴染みのヤツが来たっぽいんだが。相変わらずな感じが面
白くてな」

「あの態度が普段通りなの？ なんか強烈な人っぽいわね」

聞こえる声がどんどん大きくなってくる。

この部屋まで来るのももうすぐだろう。

オレは自分が発する第一声を、既に心の中で決めていた。

ーようこそアシユレリタへ。何も無い町だが、気の済むまで遊んでいってくれ。

ー完ー